

人物にならねばならぬといふやうに不斷の理想より刺戟を興へるやうにするのである。

前にも述べた通り、兒童は歴史的英雄崇拜をなすものであるが、之を教育上に利用することは勿論最も有効であるが、併しこれも亦甚だ間接的な理想であつて、割合に刺戟の度が薄いのである。それで兒童期には眼前の標準として、朋友中から自己よりも勝つた點を考へしめて刺戟せしめることが最も手近な理想の興へ方である。これは直接自己に勝つたものが眼前に居つて刺戟するのであるから極めて有効であるのである。この理想を興へるといふことは兒童の陥らむとする墮落を防ぐ最良法である。そして目前の情慾に馳せやうとする惡習を自然と抑制し得るのである。殊に手淫の如きは恐らく個人的罪惡のあらゆる要素を具備せる最完全なる模型と見られるのである。ここに生活の高尙なる部

分を犠牲として唯感覺上の快樂を恣にするものでめつて、此處にあらゆる自己抑制的道德中、人生に最急要なるものに對する背徳不法の行爲となるのである。これ等の不法行爲をなさしめざるにも兒童に教示すべき最高の理想は純潔の徳であるのである。人間種族の永存のためこの恐るべき惡習を掃蕩し、性的發達を正常的ならしめるにはすべからず兒童相應の理想を附與するにあると言ひ得やう。

## 第二節 運動及び營養方面に關する吾人の責務

### 一 運動に對する注意

正確なる運動には、意志が充分に隨意筋を制馭し且つ反射的又は自發的運動を抑制するを要するものであつて意識的努力と注意とが之に伴



ふものである。筋力教育に於ては正確運動を過重して、早熟又は疲勞過度等の危険を誘起せざるやうに注意せねばならない。ハンコツク氏の研究に據ると、幼年兒童は精細完全なる運動をなすに困難を感じずるものである。又之をして靜止の状態を保たしむる時は強い精神的激動の兆候を起すのである。通常小兒は全然靜止の状態を保つ態はず、其の一部の運動を禁止するも終に他部に於て不作法なる揺動を生ずるを免れないといふことである。猶ほ又ゾライヤン氏の研究によれば、小兒は六歳以後二三年間に於て正確運動の發達著しいものもあるも、春機發動期に於ては此方面の發達はむしろ休止の狀に在るといつてゐる。

これ等の事實は筋力増加の時期と筋肉制馭の發達時期とは相交替する事を示すものであつて、筋力教育に於て重大なる意義を有つてゐるのである。即ち筋力育成上此期に於ては専ら其基本的系統の發達に注意し、附加的系統のものは姑らく之を閑却すべきことを示してゐるのである。

## 二 睡眠と作業とに對する注意

性的覺醒期に於ける夢中生活が特に多大の感情的強度を有すること、を以て其の覺醒後の氣風と性向とに重大な關係を及ぼすことが多いのである。睡遊病の如きは往々此の時期に於て發生し、又睡眠と覺醒との中間状態である冥想沈思の失神状態の如きは多くこの時期に於て表はれるものである。時としては夢の激烈なるため早曉の疲勞といふやうなものゝを招來することもあるのである。時としては大半或は全部忘却せられた夢から、名狀されない悅樂の思ひに充された心を以て、又は従前注意しなかつた異性の其人に對する新なる強烈の情を以て覺醒するこ



と等もあるのである。

諸學者の報告に由ると、性的生活の初期に於ては睡眠に關しては極めて不整齊な習慣があるとされてゐる。例へば深夜まで寢に就くことを欲せず、特に小説的又は冒險的空想を以て夜間戶外を遊歩するが如きは正當的兒童の必ず經驗する處であつて、特に明月中空に懸る秋夜の如きは一種の感興のために安息に堪えないといふ風を表はすのである。

小兒は特に燈燭の光を好む傾向があるが、この時期になるとそれが一轉して自由と放任とを享受せんために暗黒を喜ぶやうになるものである。

又晩食に滋養多きものを與へ、或は就眠時に厚き毛布團等の中に高き溫度を保たせて寢しめることは彼等の情慾を導いて弊害のあることであるから出來る丈薄着せしめ、且晩食には淡白のものを與へ就寢前に

適度に運動せしめて早く眠に就くやうにすることが大切である。横臥中も決して手を局部に持ち行かざるやう習慣付けねばならぬ。

一般に睡眠時間作業時間は年齢によつて差異あるけれども、或る學者の示せる處によれば次ぎのやうである。

(年 齡)	(毎週作業時間)	(毎日睡眠時間)
八歳—九歳	十五時間	十二時間
九歳—一〇歳	二十時間	十一時間半
一〇歳—一一歳	二十五時間	十一時間
一一歳—一二歳	三十時間	十時間半
一二歳—一四歳	三十五時間	十時間
一四歳—一五歳	四十時間	九時間半
一五歳—一七歳	四十五時間	九時間
一七歳—一九歳	五十時間	八時間半



### 三 營養及び嗜好に對する注意

「病は口より入る」といふ諺のやうに、この時期に於ける兒童の種々の病氣は概ね食物の避け得べき誤に起因するものである。營養完全なれば身體若くは精神、或は兩者の發達を促し、愉快の範圍も亦擴張せられるものである。

是に反して營養の不完全はこの發達が停止されるものである。

されば食物の權衡宜しきを得るは食慾の範圍擴大せる時期に於て必要であつて、質に於て量に於て、惡しき食物の習慣は畢竟兒童の生活を破壊し、不節制の重なる原因の一を形成するものである。

春機發動期の初期には所要の食物の量に著しい變化を來すものであるから注意せねばならない。又嗜好にも一大變化を來し種々の強刺戟性のものを愛好するに至るものであることは前にも述べたが、これ等異

常の嗜好、食物に稱する嫌惡の如きは可成的是を制止し、食物の權衡を保ち、其範圍を廣くするやうにせねばならない。のみならず、茶、珈琲、其他刺戟性の食物、菓子、果物等を好むが如きも之を抑制し、是に代ふるに平淡にして健康的の滋養物を以てせねばならない。そうしないと勢力の成熟を妨害するに至るものである。

### 第三節 精神活動方面に對する吾人の責務

#### 一 兒童心身の發達に關する注意

兒童の性的覺醒期に於いては、一般に心理的變化の著しきことは前に説述したが、その中一種の病癍となれるものは、其の初に於て慢性的にして且つ輕易なる症狀を呈するがために矯正を加へられるの機會がなく往々重大な精神病と化し去り、若くは道德上の大缺陷を生ずるに至るこ



とがあるのである。春機發動期に於ける諸種の疾患の外部的原因の中には早熟の誘因となるべきあらゆる諸勢力を含めるは頗る注意すべきことである。而して春情期を早からしめ死亡率を大にし知識をして愈々廣く且つ淺薄のものならしめ、罪惡に關して見聞を汎くし、誘惑を長じ、安息を減じ、絶えず精神を攪亂し、多く不潔の空氣を呼吸せしめ、傳染病に罹るの機會を與へるものである。

青年精神病の最適切なる療法としてマローロ氏は訓練及社交を以てし、之に加ふるに繼續的に仕事をなす力、豫定通り行爲を果すの力を養ふべきを以てしてゐる。吾々の一考を要することである。

### 二 夢幻的空想に對する注意

最高の眞理に對する興味、養成及實物以上の或物としての思想の發

展の上に於てはこの傾向は宜しく適當に管理されるべきものであつて決して一概に除去されるべきものではない。特に想像的文學の發達は後來この種の性質に待つことが多いのである。

夢幻的空想は青春期に於て其の黄金時代に達するもので、現實界を補足し、吾々の諸能力を統制する所以のものである。時には惡結果を産出することもあるも、多くは身體並びに精神上優良なる諸傾性がこれから生起することがあるのである。

### 三 最も多い憤怒の情に對する注意

憤怒は凡ての他の感情と同様、青春期の兒童に於て特に其勢力を加ふるものである。大抵の兒童は春機發動期頃には、争鬭を好むの傾性著しく増加し、往々何等の原因ないのに事毎に憤怒と憎惡とを向けるもので



ある。但し彼等は表面猛烈なる怒を發し何事をも顧慮しないやうな風を見せるけれども、其衷心に於ては案外思慮分別の念を失はないものである。そして終には内部的のものとなる傾向がある。即ち自己の利害關係から打算的にその情を抑制するに至るのである。これは恐らくこの年齢頃から自我を感知する力著しく發達するためであらう。

然しかくの如き憤怒の情一旦發するや危害の度は遙かに大きいものである。是れ體力強大となつたことからばかりでなく、其復讐的實行方法に關して熟慮を経てゐるからである。

一體憤怒そのものは人生の競争場裡に一大活氣を添ふものである。乃ち宜しく發怒の目的物を選択し且つ其形式を改新し、之が養成に意を加へて正當なる憤怒たらしめなければならぬ。決してこれを滅除すべものではない。

#### 四 早熟に對する注意

感情及意志又は知力の早熟は個人が未だ完成せざるに先つて個人完成の作用を制限する諸動機を發現せしむるものである。是等早熟は兒童教育上宜しく豫防せられねばならないことである。兒童をしてあまりに早くから内省に耽らしめ、又未だ十分なる克己力を有せざるに先つて、早く慾情を起さしめるやうなことがあつてはならない。他界を渴望するの情の如きもあまりに早く熱烈たらしめてはならない。

其他心配、黨派心、感覺過敏、虛榮心の如き凡て整齊にして調和した多方面の發達を妨ぐるやうな特殊の發達は何れも防止せられねばならないのである。



五 兒童の感情方面への注意

この期の精神的變化の中感情方面の變化程甚だしいのではない。而してややもすれば活氣横溢するの餘り、多少の弊害を生ずるものである。それで教育家はよろしく其下劣なる傾向を制御して、眞善美に對する高尚なる思慕の情に轉化させるやうにせねばならない。

そして種々の感情が相前後して發達し、而かも動搖して定らず、情緒も亦相反對の情互に相對立し反應して發達するものである。即ち發達の勢力は新境界に擴張し、或る時は此方面に、他の時は他の方面に發達するものである。これは思ふに生物學上の經濟であつて、是れによつて精神も亦最良の發達をなすものである。

教育上の理想は出來得る限り、種々多方面に諸能力を發展せしめ、一時は矛盾撞着を生ずるも自然のまゝに放任して其發達を阻止するやうな

ことがないやうにするにあるのである。

この時期の兒界の精神界は恰かも蛇が昨年の皮を脱棄てるやうなもので、兒童らしい意識を脱却して成人の新意識を着けやうとしつゝある時なのである。

これがために一時心的生活が攪亂せられ、この際多くの衝動が頭をもたげ、更らに一層高尚な精神力の是を指揮し制御するものあるを待つのである。

この時期に於て兒童に充分なる自由を與ふことは甚だ重要なことであつて是と同時に相當な監督をなし、善良なる方向に指導することが甚だ肝要である。この時すべての衝動を充分に善良に發達せしめない時は、後に至つて之を統御し、整正すべき高尚なる能力も亦其發達の刺戟を缺くに至るものである。吾々がこの際目的とせねばならないことは



人性の調和的發達である。

### 六 覺醒期の兒童訓育

性的覺醒期に於けるあらゆる事實は、主として性といふ根本的事實に關聯せる各種の特質の發展に歸着するのである。是故にこの期の兒童訓育上、常にこの一大事實を忘るることなく、彼等の一切の行動を凡べて是方面からして監視することが必要である。而して兒童がこの個性を完成するまでは、性交に關する行爲はすべて之を防止し、精神及び身體の最も嚴肅なる潔白は、成人になるまで、精神的に、生理的に、將た又倫理的に必ず保持させねばならない。而してこのためには、制欲と克己との精神を充分に訓育せねばならないのである。制欲克己は眞に男子の男子たる、女子の女子たる所以である事を懇切に説明せねばならないのである。

## 第貳編 兒童の生命を生む兩性及愛情

### 第一章 本能性

#### 第一節 本能とは何ぞや

##### 一 本能の定義

本能を概念的に定義を下して見たら大體次ぎのやうになるであらう。練習又は經驗に依らないで外圍とそれに對する反應との間に存する聯絡又は聯絡傾向をいふのである。例へば鳥類が生後直ちに餌を啄き、或は巢を作り、蜂が蜜を貯ふるが如き、これ等は生後の練習又は經驗によらないで一定の外圍に對して一定の反應運動をなさうとする生得的性能であつて、神経系統の構造中に存するものである。



この本能は實に生物學と心理學との間に亘る重大問題であつて、古來多くの學者によつて色々に定義を與へられてゐるのを見る。今試みに諸家の定義を列記して見るに

カント——未だ概念を有しない事をなし、又は得んとする要求の感である。

ハルトマン——無意識的に知られた目的に達すべき手段の意識的執意である。

スペンサー——組織せられた遺傳的習慣から生じた複合せる反射運動である。

ダーウイン——遺傳せる習慣である。

ロマーネス——性質は順應的であるけれども手段と目的との間の關係に就ての知識なくして遂行せられるやうな動作を

意識的に實行せしむるすべての精神能力である。

ラマルク——遺傳された習慣である。

リユーイス——失格した智能である。

ヴント——習得性の遺傳したるものである。

### 二本能の特性

本能は神経系統の構造に基くものであるといふが、必ずしも誕生當時から發現するものではない。匍匐とか直立とか哄笑とかいふものは本能のものであることは勿論であるが、生後一定の日數を要してから初めて出現するものである次に述べやうとする生殖本能等もやはりそうである。

本能は突發的に出現するものではなく、漸進的に生育するものである



といふことが言ひ得る。例へば嬰兒の人見知りのやうなものである。本能は又必ずしも永久的のものばかりではない、一時的のものも多くあるのである。例へば人類の場合の吸乳本能のやうに、嬰兒には發現するも成人は吸乳の術を知らないといふことがある。又その本能發現の時期に於ても之を作用せしめない場合は廢滅する時がある。雛の出生後直ちに母鶏から離して生育させること十數日に及ぶと母鶏を追蹤せんとする本能を失ふといふことである。

本能は概して目的を意識しない盲目的のものであると言はれてゐるが、記憶作用を有する動物にあつては、必ずしも盲目的でない。その動物の意識し得る程度の目的は豫想せられるのである。即ち本能が經驗と結合する時はその結果たる動作は甚だしく變化されることがある。或は本能發現のために著しく不快の結果を招致した時は、そのために爾後

その本能の制止せらるることがある。

蜂又は蟻の造巢本能は本能の最も特殊化した定型的のものであるけれども、多くは不定漠然たるものである。例へば雛が啄餌の際初めは食物でない小物體をも凡て啄むものであるが、次第に經驗を重ねるに従つて、啄餌に關する特殊の習慣として固定するに至るのである。

本能には反應の形式の一定しない一般的のものがある。例へば小兒が新しい玩具を得た時は、之を引き、轉がし、落とし、摘み上げ、口に入れ、噛み、採るやうな傾向を表はすが、これは哄笑、匍匐のやうに運動の型式一定しないものであるがやはり本能と見るのである。

### 三生殖本能

食物を求め、身體を防禦する自己保存の本能に對して種族保存を目的



とする重要な一本能であると言ひ得やう。是の本能が動物界にあるために、動物界に於ける戀愛粧飾美等の生理的並びに心理的の諸現象を生ずるのであると見られる。

この本能の最も強烈に發現するのは人類にあつては、恐らく所謂春機發動期であつて、その時期は前編に於いて述べたやうに人種により、女性により又種々の環象によつて、多少遅速はあるが兎に角この時期から猛烈に作用し始めて、一生繼續するものである。

この本能を分析して考究することは甚だ難事であるが、この本能を以て、細胞原形質の一種の飢餓に基くものとなすものがある。ポニー氏の如きは、一種の化學的作用の直接に、若くは神経系統の中間物によつて間接に、生物の原形質に働けるものとしてゐる。

新個體の發生がこの本能の目的であることは勿論であるが、生殖腺の

状態と必然的關係の存在しないことは、去勢が必ずしも性慾を絶滅しないこと、小兒殊に嬰兒に於てしばしば性慾の發現を見ること、及び婦人に於て月經閉止後尙この本能の存在することなどによつて證明されるのである。

この種族保存の本能と自己保存の本能との關係を見るに、自己體を完全に保存するといふことは、種族保存上必要なことであつて、この種族保存のためには一日も自己體を安穩に生存せねばならないのである。然し自然法はこの兩本能の間に著しい矛盾を與へてゐることが多い。即ち個體保存よりも種族保存の方を重要視してゐるかの觀があるのである。例へば生殖のためには自己體を難なく犠牲に供し、又子孫愛のためには親はその身を滅ぼしても顧みない事があるのである。これ等の實例は廣く動植物界に見られるものである。單に自己保存といふ見地から



見たならば、種族保存の本能等は害あつて利のないものであらう。即ち徒らに營養分を要し、且つこれあるがために却つて個體の生活をして複雑多様ならしめ、その勞を増すのである。

## 第二節 本能の進化

### 一 本能の進化を決定する一般的原理

ホイットマン氏が「動物の行爲 (Animal Behavior) 中に

「本能の最初の起原を探索すると、吾々は原形質の構造に據る性質に到達する。而して本能の進化は一般に器官發生と並行する。器官の發生が原形質の基本的構造から發現するやうに、本能の發生も亦厚形質の根本的機能から進展するものである。……」

本能は個體發生に於ても、系統發生に於ても、共に智能に先立つて

現はれ、而て智能の用ゆる一切の構造的基礎を供してゐる。云々。」

と言つてゐることや、それからダーウィン氏が、その「種の起原」 (Origin of Species) 中に

「各の種が現在の生活状態に於て安寧に暮らすためには、種々の肉體的構造が重要であると同様に、又其色々の本能も重要であるといふことは、何人も普く認める所であらう。……いかに微細であると言つても兎に角本能が變化するものであると云ふ事が指示されたとすれば、自然淘汰が此變化を保存し且つ絶えず集積して必要な程度に至らしめたといふことは怪むに足らない。私の信ずる如んば、最も複雑で且驚くべき本能も其の起原はすべてかくの如きものであらう。」

と言つて本能の進化を逐次的進化によつて説明しやうと努力してゐ



るのである。これ等の説が假令真であるにせよ然らざるにせよ、我々はこの本能の進化を考察する上に於いてまづ第一步に念頭に浮べなければならぬ事なのである。

更らに吾々はその本能の發達の順序の一般的原则を生物學上の事實から少しく考察して見る必要がある。

一般に植物界に在つては、その自然的發達の順序としては、根莖、葉、花果實といふ風に略ぼ一定し且つ固定して居るのを見るのであるが、動物界に於ても、身體各部の成長、毛髮、頭角といふやうなものの發達は略一定して殆んど變化はないのである。然して其れ等の構成と其の本能とは共に深い關係をもつてゐるのであるから、吾々は各種族の動物の本能の發現する一定の順序を豫定することが出来るのである。

此等の本能の發達の順序を最も普通に且つ論理的に説明するものは

前述のやうな個體發生と種族發生との並行説である。即ち或る動物の本能の發達の順序と其の種族が最下級の動物から漸次發達進化して現在の形式にまで到達した順序との間に並行類似の點を認むるのである。それであるから生後兒童の發達と人類の發達との間には並行した類似點があると言ひ得るのである。この生物學上の法則は種々の本能が始めて發現する時期を知るよりも、むしろ最も顯著な時期を知るに助けとなるものである。

更らに本能の進化に於て理論的考察法として知らねばならないことは、最も強い本能は總ての種族の動物に於て、すべての時期を通じて一般に必要なものでなければならぬといふ事である。例へば游泳本能は水中又は水邊に棲むもののみ必要なものであつて、すべての動物に必要なといふことはない。所が有害不利なる刺激を拒避する本能は、發達上



すべての動物にすべての時期を通じて必要なものである。

その次ぎには、異なる本能は異なる發達時期に必要であるといふことも重要な考察法である。若し總ての本能が如何なる動物にても、其種族に於けるがやうに、其個體に於ても、全く同順序に發達するものであるとすると、其の動物は、恐らく永存することが出来ないであらう。例へば再生的本能や養護本能は成熟して動物に現はれてこそ其の種族に始めて有効であるので、その他の時期に現はれては却つて有害であるのである。次ぎに章を改めて述べやうとする父母本能等も、種族發達上に於ても最も古い本能の中であるけれども、個體發達上に於ては稍々おくれて顯現する本能なのである。

## 二本能の進化に對する諸説

本能の起源については、生物學者、心理學者、哲學者、教育學者等最も心を悩ましたものであつて、従つて十人十色、異説紛々たるものである。然し各本能は最初から完全なものとして、創造されたものであるといふ所謂天授説は一種の神祕説として、本能は漸次進化形成されたものであるといふ説の中にも多種多様があるのである。今その主なる學説を紹介すると

### 1 睿智失踪説 (Theory of lapsed intelligence)

この名稱はリウキス氏が始めて命名したものであつてラマーク、アイメル、ゴープ、ヴント等の諸氏が主張する所である。これ等の學者によつて少しづつその所説を異にしてゐるけれども、その共通思想によると、習慣が代々相傳はつたため、初めは睿智的であつた精神活動も竟には固定して永久的の本能となつたのであるとするのである。個體の發生に於



でも初めは睿智的に行はれたものが、しばしば反復せらるる中には自動的のものとなるやうに、系統發生に於ても最初は睿智的に行はれた動作が反復と遺傳とによつて、その痕跡を神経系統の上に殘し、その結果、個體としての經驗を積まない先に、尙ほよくその動作を機械的に行ふことを得るに至るのであると考へるのである。

然し後天的特質の遺傳を確證すべき證據を缺くことと、進化の低い階級に於て複雑なる睿智の活動を認むることの困難とは、この學說の難點と見做されてゐる。

### 2 反射說又は自然淘汰說 (Reflex theory or Natural selection theory.)

スベンサー、ワイズマン、ダーウィン等の諸學者の主張する學說であつて、その說によると、本能といふものは單に外圍に對する反射的順應の蓄積せられたものを、自然的淘汰によつて保存したものであるとするので

ある。ダーウィンは前述の睿智失踪說を以て甚だしく誤つた學說であるとして言つてゐることは本節の(一)の初めに記したことである。

ロマーネスは以上二說共に眞理を含むものであるとして、本能の起原を以上二說の中の一說に限る要なしとし、多くの本能は睿智的順應と自然淘汰と相俟つて成るものであると論じて兩說の折衷說を主張してゐるのである。

### 3 有機的淘汰說 (Theory of organic selection.)

この學說は有機的淘汰の原理を適用して本能を解釋しやうとするものであつて、モルガン、ポールドキン、ゲロース、スタウト等の諸學者が之を主張してゐるのである。これ等の學者の定義に依ると、有機的淘汰といふのは、睿智的たると有機的たるとを問はず、有ゆる種類の調節は有機體の不完全な點を補足する效能を有し、自然淘汰によつて趨異が確立して



本能を比較的獨立のものとするまでは、その調節によつてその種の生存を全うすることを得るとなす説である。即ち自然淘汰に於ては外圍のために有機體が全體として保存せられ絶滅せらるる義なるに對して、有機的淘汰に於ては個體の行ふ趨異又は調節は、意識的のものたる否とに關係せず、一時その有機體を保存する効力を有し、その間にその調節運動は構造上及び機能上の屬性として固定し、茲に初めて本能の成立を見ると考へるのである。故に本能の成立には間接に意識活動を含有せることはあるべきも、睿智失踪説のやうに初め意識的なりし動作が直接に固定して本能となるとは見ないのである。

### 第三節 本能の種類

#### 一人類の本能の數

ジエームス氏が列舉した項目を示せば、

- 1 吸乳。
- 2 噛む。嘗む。しかむ。
- 3 握る。掴む。
- 4 遠くにある物體を指して、それを欲する事を表す聲を出す。
- 5 手で掴んだ物體を口に運ぶ。
- 6 啼く。笑む。
- 7 顔をそむく。
- 8 頭を直立す。
- 9 座す。
- 10 立つ。
- 11 移動即ち足を踏張る。匍匐。歩行等。



- 12 發音。
- 13 模倣。
- 14 競争。
- 15 好闘性。憤怒。
- 16 同情。
- 17 狩獵本能。
- 18 恐怖。
- 19 取得性、この本能から猜忌、嫉妬を生じその變態として蒐集性、窃盜狂を生ず。
- 20 結構性。
- 21 遊戯。
- 22 好奇。

- 23 社交性及び内氣性。
- 24 祕密性。
- 25 清潔性。
- 26 謙遜。羞恥。
- 27 戀愛。
- 28 親子の愛。

等の如きものを以て人類の保有する本能性と見てゐるが、これはジエムス一個人の記述であつて、その本能表は學者によつて多少相異なることを承知せねばならない。吾々から考へると殆んど本能ではあるまいと思はれるものまで本能性として記述してあるのを見てかくまで人類には種々の本能があるものと驚かされるのである。



### 二本能の分類

以上ジエームス氏が列擧した二十有餘の本能を科學的に分類することは甚だ困難なことであるが通常之を大別して、自己保存の本能と種族保存の本能とに分つてゐるやうである。

一體本能を分類するに當つて

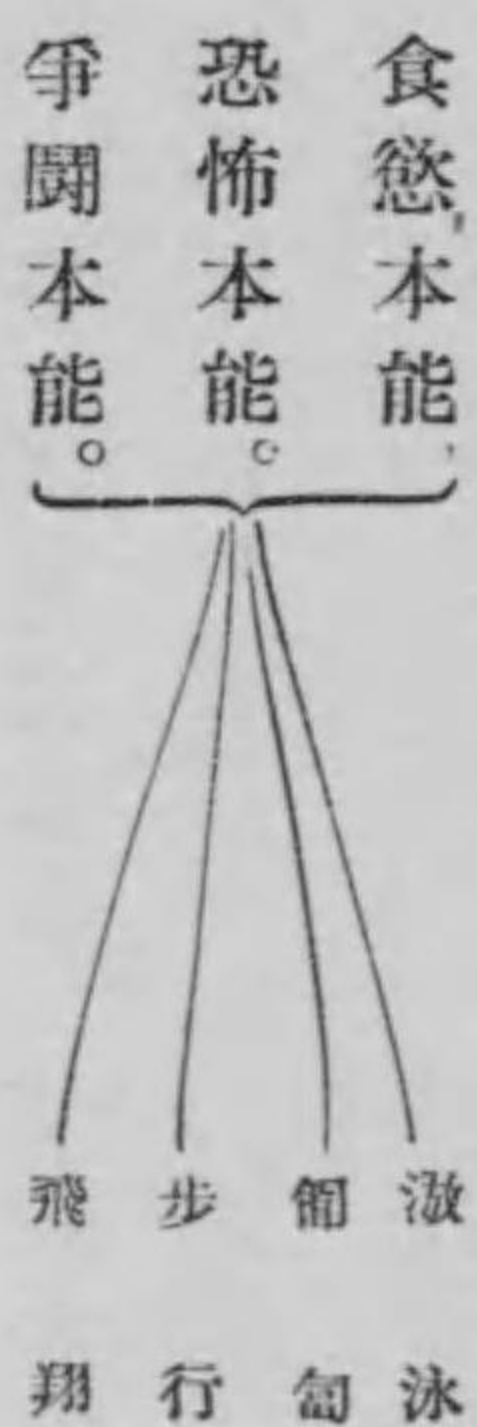
- 1 本能を誘起せし刺激の性質。
- 2 本能によつて發動せられた運動の種類。
- 3 其の動物の生理的及び心理的状態。

等に據るとしたならば、本能の分類は到底不可能な事ではなければならぬ。そこで本能を分類するの基礎とすべき事項は、元來すべての本能は必要なるが故に保存せられてゐる。かく總べての本能を保存させる所以の必要といふ事ではなければならぬ。即ち總べての動物は同一の普

汎的必要を有してゐる。故に本能的行動の必要即ち目的に基ける分類は動物生活の總べての形式に適應することの出来るものである。今分類の一例を示せば

#### 1 個體本能或は自己保存本能

個體の利益を第一目的としてなされる行動の傾向はすべてこのものに屬する。そして個體本能の主要なる目的は、食物を求むることと、仇敵を拒避することとである。それでこの本能中に入れられるものは



#### 2 父母本能

幼者のために準備し、又幼者を産出し、且つ養育することを第一目的と



するすべての行動をこの本能の下に屬せしめる。この本能中に入れられるものは

生殖本能。道德本能。宗教本能。

鳴聲。

造巢。

自己誇示。遊戯及裝飾。

配偶者のためにする争闘。

### 3 社交本能或は團體本能

共同生活をなす動物で、直接彼等の屬する團體の利益を先とし、僅に間接に自己及種族のために働く本能をいふ。即ち自己及種族のためのみならず、又彼等が從屬する團體のために働く本能である。この本能は人類及昆蟲類等に見られる。この傾向は

自負心。

功名心。

競争。

嫉妬。

苦惱。

恥辱。

等に發達するのを見る。

### 4 適應本能

能動的に刺戟及其反應作用の回數を増加しやうとする内部的傾向がこの適應本能の基礎である。その傾向に自發運動と運動の反復の二方面があるこれ等の傾向は直に本能と稱される、模倣・遊戯及好奇心等の基礎となるものである。



### 5 齊整本能

強力にして不利なる本能を未發に防ぎ、有利にして緩慢なる本能に覺醒の時を與へ、以て其正良なる影響を起さしめ個體及び其種族のために種々の本能を整理し協力して働かしむる傾向を總稱して齊整本能といふのである。道德本能、宗教本能等はその例である。

### 6 合成的及雜種本能

この合成的及雜種本能として見られるものは

採集本能。

構成本能。

審美本能。

移動本能。

律動的本能。

表出本能。

等種々なものがある。これを一々詳細に説明する時は制限がないからこゝではその種類をあげるだけにして置く。

### 三 固定本能、未定本能、繼續的、一時的、定期的本能

本能の價值と環象の變化に對する適應現象を考へて見るに、動物の本能は彼等の行動をして、能く其の環象の狀況に適應せしむることを得て始めて、其の自己保存及び種族保存のために有利であるといふことが言はれる。例へば蜜蜂の造巢、採蜜、蜘蛛の造網、捕蟲のやうな、一定の構成を有する動物にあつては、有益な行動はすべて環象に於て殆んど一定不變である。然るに恐怖の一般的本能は常に見慣れぬものを恐るる一種の型式に變り、更らに經驗を積むにつれ、或る特殊のものに對する恐怖とな



るといふ風に、或る特殊の情況にある有益な行動は其の性質常に一般的であつて固定して居ないのである。

年來の経験と自然淘汰とによつて、自然は生物をして時に失命の憂ない譯ではないが、大體に於て彼等及び其子孫を永存する行動の準備をなさしむる一定の刺戟に對して、どんな型式の反應をなさしめても都合よい場合には、其の本能は固定しないで常に可塑性 (Laws of docility) を有してゐる。そのために模倣又は経験によつて現在の環象に最もよく適應した反應が發達するのである。そしてやゝ固定した本能でも尙ほ其環象の變化は一時的適應をさせるため多少の可塑性を存しておく必要があるのである。

かくの如く或る本能は年來完全なものであつて、其種族の永年の間變化することなく又或る本能は其始め不完全であつて型式も一定せず、殆んど個人的経験によつて發達した習慣と異なる所がないやうなものとある。前者は之を固定本能といひ、後者は之を未定本能といふのである。一般に固定本能は下等動物に多く、未定本能は高等動物に多いのである。

動物の構成及び或る種の行動の必要は年齢と共に變化するものであるからどんな種類の動物の本能も其の生涯常に同一の強度を有するものは殆んどない。

例へば食慾や恐怖のやうな本能は多少時期によつて強弱はあるものゝ、生後直ちに發現して終生繼續するものである。この種の本能を繼續的の本能と言つて居る。

又遊戯のやうな本能は生後直ちに顯現せず、そして一旦現はるゝや多少その程度を減ずることがあるけれども、殆んど一生繼續するものである。



る。雛が母體を追ひ駈ける本能は經驗によつて發達させることがなければ、一生現はれずにすむものである。かゝる種の本能を一時的本能といふのである。

又候鳥の移住期、牝鶏の雛を保育する時期等一定の時期に限り現はれる本能がある。それは全く律動的であり定期的であるから、之を定期的本能といつて居る。

吾々が性の問題を考へるにも、これ等の諸本能について明瞭な了解を持ち、且つ各本能の最も顯著に發見される時期を早く發見することである。この時期を發見することは性教育上甚だ重要なことであつて、それが決定される時は吾々教育者並びに家庭の者が、其の欲する所の理想に従つて最も完全に、且つ順調に正しくその本能的性能を發達させることが出来る最適當の時期を發見することが出来るのである。

#### 第四節 本能的行動と感情との相關々係

情緒とは感じやうとする傾向であり、本能とは行動しやうとする傾向であることは明瞭である。こゝでこの感情的傾向と本能的行動との關係を考察して見るに、多くの本能的行動は暫くなりとも感情的傾向を伴はないのはないからすべての本能は何等かの感情を伴ふものであるといふことが出来る。換言するとすべての情緒は之に對する身體的表情を有して居り、此等の表情作用は之に對する本能的行動によつて種々に變化されるのである。

例へば忿怒の情が起きた時に表はれる筋肉の緊張、顔色の急變、呼吸の切迫心悸の亢進とか又不規則運動とかいふものは、特に争闘の純本能的運動から起つて來る表情なのである。



## 第二章 性と愛情との關係

### 第一節 自然界に於ける最大の奇跡としての愛

最大の奇跡とは何であらうか。それは人類進化の成果でなければならぬ。そしてその人類進化の成果中最大の奇跡として見られるものは、愛の進化でなくて何んであらうか。この得難い人類の愛は全く最後であつて最高なる進化の成果である。愛は創造の極であると言ひ得やう。進化といふのは物質上の進化ではない、物質は究極に於て進化はしない。して見ると進化は心、精神、靈界に於いて見られる行程である。進化なるものの要素や階程に對しては種々様々の議論はあるであらうが、其

の目的結局は既に明瞭であつて疑ふことの出来ないものである。

自然界の進展は合理的であり、その目的は結局道德的である。既に其の初め原生動物に於て、吾々は自己生存奮闘の存在することを知り、更に營養とか生殖とかいふ種族保存上重要な他生存奮闘のあることを知つてゐる。かくして次第に有機界を進展して來つて、その間に善惡といふ道德律が共に起つて來るが、その兩者に於て必然的に善なる方が強く働くのを見るのである。そこで吾々は自然の目的はどうしても道德的發達にあることを知るのである。

終に哺乳動物が出現するに至つて、こゝに不思議な母性の發現を見たのである。そこでこの哺乳動物の出現といふことは一面に於て生物學的に見るならば、母性の發達を意味し、社會學的に考へるならば、家族の發達となり、道德的には即ち愛の進化を意味するのである。



廣く見渡すならば、動物界には他愛主義のお蔭で出現し且つ生存して居る哺乳類のやうなものがあり、一般社會には愛を醇化するための家族があるのである。愛はほんとに世の初めから次第次第に發達して來て、今日に至つたのであると見られるのである。

愛の進化を動植物以下まで辿つて見たらどうなるであらう。そして無機物界にも或る種の愛の進化的系統を發見することが可能かも知れない。勿論そこには、倫理道德的要素を含める愛の出現は認められないうであらうが、然し少くとも愛の進化なるものに多少なりとも適合する或るものを發見し得るであらう。

宇宙の初現は星雲の集合であつたことは、學者によつて唱道せられ吾々もかく信じてゐる。この星雲が次ぎに無數の原子の集合を來して一の雲塊となり、炎々と燃えつゝ、非常な急速力で、この空間を回轉しつゝ、あ

つたのである。この雲塊から破れて固つてこの吾々の世界が出來たのであるとは、實に奇異であり神祕ではないか。かくの如き状態を引き起したのは全く相互間の引力と化學的親和力とであると言ふ時吾々は更らに驚異の目を看開らかねばならない。此等雲塊の中で、二個の原子が結合する程に冷えたのは、此二つが他の原子よりも化學的に強いからなのであつて、既に茲に地球進化の原因が確保されたのである。引力又は親和力で、此結合が第三、第四と原子を吸合し、一の家族をなし力強くなつて四邊を睥睨したのである。それ故に益々來り従ふ原子が多くなりその量は年と共に増し、種々の變動を経て、其活動次第に静まり、終に堅い地球が出來上つたのである。

前にも言つたやうに、かくなしたものは引力と親和力との二つである。然し引力、親和力等と云つても、その正體は一向判らぬ唯事實と認むるの



みてある。かくして、物的進化も既に心的進化の名を冠せらるゝに至るのである。ニュートンも原子が相引くといふ意味は寸分解らぬと言ふたと聞いてゐる。

元始から見ると、この世界の成立方式は確かに進化ではあるが、結果から見るときは單なる開發である。物の進化したのではなく、靈の開發したのである。又默示であり、神性の現象的表顯であり、理想の徐々の實現であり、要するに愛の進化なのである。

## 第二節 兒童に發達せる愛情

### 一 幼兒期に於ける早熟性の愛情

八才以下に於ける幼兒の間にとりかはされる愛情は實に純潔なる愛として見られるものである。

この期の男女異性間に發現する愛は毫も、彼等自身に意識せられるやうなことなく言はば無意識的の愛として強烈に發現することがあるのである。従つて透明純潔なものであつて、單に異性相互間に遊嬉を共にする事を好み、或は無邪氣な紀念のための贈物等をなし、殊に食物等を贈與し、且つ往々意味ない抱擁とか接吻等をなすものである。然しよく見てゐると兩性間に往々嫉妬心に類したものを表はす時があるものである。又この期の兒童には異性間の羞恥心等といふものは少しもなく、愛情に關して他人から嘲笑されること等を恐れるといふやうな心配は毫ももたないのである。そして時には相互に未來の夫婦を以て相許し、將來の自分等の生活に關して色々豫め協議するやうなことがあるけれども、この種の交情は後年まで永續して彼等を幸福な夫婦として見出させることが甚だ稀である。この事例は吾々が幼時から許嫁として生活し



て居つた男女間にしばしば見受ける現象である。

この種の愛情は成人間には殆んど見られない性別關係を超越した愛と見ることが出来るであらう。「ブレトニツク」の愛とは即ちこのことなのである。女性はやゝもすればこの「ブレトニツク」の愛を以て眞に理想的なる天國的純潔の愛として渴仰して居るのを見るがこれは考へものである。

然しこの種の早熟的爱情はこの期に於ける兒童の正常的聯想力の範圍を狹隘にし、且つ身體上の早熟現象に陥らしめることがあるから要心せねばならない。

## 二 所謂兒童期に於ける愛情

是の時期に於ける兒童の愛情は、前期に於ける兒童の愛情のやうに無

意識的のものではなくなつて来る。この戀愛の中に幾分か自我の覺醒を知つて来るのである。そのためにいくらか變態的愛情を取り交はす事が多いのである。八才以下位の幼兒は全然羞恥の情がないために、露骨に愛情が表現されるが、この期になるといふと、異性相互間に羞恥の念が生ずるから、愛着の目的物は不斷に追求されるけれども、常にその兩性間に或る間隔を置くものである。自分の愛する人に物品を贈與するにしても、直接面前に於てすることなく、却つて先方即ち愛着の目的物に知られないやうに大抵匿名で以て行ふものである。然し假令匿名でやつても愛の對象は誰なるかは相互に感知して居るのが不思議である。自分の愛人と對坐する時でも、各其の思ひの情を告白すること得ず却つて相互に煩悶混雜の情を生じ、後日文章を以てその當時の感想並びに自分の情を對者に通ずるといふやうなこともあるのである。この現象は餘



程以後まで繼續するものである。

又両者が公然と手をとつて歩行するやうなことをなさず、時に或は兩者の關係に就て他人の嘲弄を受けること等があるといふと大變なことになることがある。特に他人からの嘲弄を避けるため、却つて故意に愛人に對して反對の情を有することを誓ひ、往々その反動として眞に嫌忌又は憎惡の念を持つて至ることがあるのである。

男兒がこの種の愛情を女兒に對して表明するは、主として各種の誇耀的方法をとるものである。即ち或は各種の運動競技に依り、若くは其他の方法によつて機會ある毎に愛人の面前に自己を誇耀し、宛も野蠻人に於ける求婚を縮寫したやうな觀を呈するのである。吾々教師はこの現象を教室内に於て時々見ることがある。即ち戀を知り始めた男兒が、急に學業に對して奮勵し、知的方面に於いて常に優者の地位にあらんと努

力することである。つまり戀情から刺戟されて學業成績が優良になることがあるのである。然しこれは一般兒童に於て見られるのみならず、成人に於ても異性に勵まされて學成り功達したといふ例は少くないのである。

之に對して女兒は陰には此等の舉動に熱心に注意するにも拘らず、陽に無頓着の様子をなすのが常であり、以て善く男性をして一層接近させ、一層精細にその愛情を告白するに至らしめるものである。

### 三 特異なる兒童期の愛情

女兒が年長なる男性に對し、男兒が年長なる女性に對する愛情の強烈なるものがこの兒童期に於いて往々見られる現象である。この種の愛情の發現する場合の事情は色々あるだらうが、大體次ぎのやうな原因が



考へられる。即ち

- 1 兒童が同年齡の異性と相交はる機會の容易に與へられない時。
- 2 長者敬愛の念によつて、年長者を相愛するに至ること。

これ等の原因及場合に於て、この種の愛情が觸發されるのであるが、この愛情は年少者間の愛情のやうに簡單には考へられない。といふのは、年長者は年少者と違つて、その對者に對して甚だ深切を盡すからである。この親切心が益々年少者の愛情をして濃厚にするものである。

異性の年長者に對する愛情を有つてゐる兒童は、やゝもすれば議論好きとなり、執拗にして且つ嫉妬深さを常とし、一般に早熟の現象を呈するものである。

性的覺醒期に到達した兒童は、更らに年長者の異性を戀慕するものである。この年長者に對する愛情といふのは、この期の兒童に表はれる特

異の愛情であるが、この種の愛情は害少しくて益多いものであることに吾々は注意せねばならない。それは對者は年長者であるといふことから、その年齡の懸隔が安全なる保障をなすためでもあらうが、往々却て兒童に従順の徳を涵養するものである。このことから或る學者の如きは「大人と小兒とは師弟とならんよりは相互に愛人となつて、教授は愛に基く無償の仕事とならねばならぬ」とまで考へてゐるのである。

この種の相愛關係に於ては兒童の感情は、主として讚美、尊敬、尊崇等の念に満ち、之に對する年長者側に於ては、自己が保護すべき者として兒童を見、それに對して責任觀を持ち、かくして兒童を自己の慾するまゝに監督し得ることに快感を覺えるにすぎないのである。その結果として兒童の輕躁不定の性質は往々年長者の善良なる模範によつて、一定の良好なる性質を得ることが出来るのである。これは兒童が自己よりも一層



完全に近いものを愛し、且つ自己の理想化せる他性の模型に従つて自己の精神を鑄成しやうとする情に出るものと観ることが出来るのである。

### 第三節 春機發動期に於ける兒童の愛情

#### 一新しい意味の性的愛情

愛情發達史上判然たる一時期を劃するのは、この春機發動期である。この時期は全く愛情の革命時代であり、新生期である。

而して男女兩性は一般に或る時期は却つて互に相隔てんとするの傾向は、この時期に於ける特徴ある愛情の表はれ方なのである。

従來彼等の心の庭に育まれて居た愛の花は、性的覺醒期に訪れた狂瀾的の風雨には堪えきれず、むざむざ凋落の悲しみに濡れねばならなかつたのである。そして新たなる更生の天地に愛の種子を播きおろし、豊潤

なる恵みに會つて、その萌芽するや急激にして猛烈、その姿は實に多様に於て奇怪、全く愛情をして再び新らたに人心中に形成させたかの感あらしめるのである。かくの如き愛情の變動のために、一切の關係、思想及理想等は全く變革されるものである。従つて全然自家獨特なる性格を發表し完成しやうとするの新衝動が、男女兩性何れに於ても起つて來るのである。

性といふこと自身も亦従前とは全く異なる意味を帯び來り、旺盛なる羞恥の情が起り來つて、新たなる性的意識が現はれて來るのである。そして性別によつて、生活様式、利害觀念、未來に對する計畫が大いに分化して來るのである。

かくて男兒は次第に女兒と友たることを羞ぢ、自己の男子たることを確守せんことを努め、女兒も亦次第に女性たるの自覺を増し、男子に對す



羞恥の情も大いに加はつて來るのを見られる。かくて男女共に異性の自性に對して各々暗に探查をなすを知り、且つ之れに對して深く警戒をなすものである。

愛情發達の最後の行程は、實に身體的及精神的成熟の時代にあるのである。この時代に於いて始めて十分なる且つ正常なる意義に於ける愛が發現するのである。蓋し性的機能の發達は精神の發達を促がすべき最大なる刺戟であつて此の時に生ずる新たなる好奇心と、新たなる利害觀念とは、活潑なる精神をして従前未だ知られなかつた幾多の法則と事實とに接觸せしむるものである。

## 二 愛情の移動

愛情の移動といふことは、變愛の對象物即ち目的物の變動を意味する

のである。前述せるが如く愛情の對象物は幼兒期から青年期にかけて青年期から老年期にかけて、時々刻刻に變移するものである。決して一定の目的物に固着するものではない。假令その目的物が或る種の固定化を示すやうであつても、その内面に於いては色々に變動して居るもので、常に目的物の去來が感じられて居るのである。これは一面から見れば愛情の進化の行程とも見られるが、他面からは愛情の不定移動の傾性と見られるのである。專一の愛情といふものは、餘程理性からの支配を受けたものか將たまた強い道德律から束縛されて居る愛情でなければならぬ。感情としての一つの愛情は必ず不定性を帯びてゐる人間味のある愛情としては、その何れなるかは讀者諸君の考慮に任せることゝして、この愛情の移動の最も甚だしい時期は、とりもなほさず感情界の變動の最も激甚である春機發動期でなければならぬ。この時期の愛情



ほど烈風迅雷的であり、閃光催涼的なものはあるまい。これほど彼等青春期の兒童は懊惱して居るのである。彼等兒童の愛情は一定不易なものではないのである。殊にこの青春期の兒童の中でも近代的自由戀愛論者の愛情の移動ほど激迅なものはないであらう。従つて戀愛そのものも尊い永續性を缺き、常に新しい方に轉向しやうとする傾性があるのである。そのためこの自由戀愛主義の主張者は當然の結果として、戀愛の冷ひた時には離婚をして平氣で居るのである。そして一方他物に對して戀愛の熱烈さを感じた時には、何事も考へずに直ちに結婚を約束し、同棲生活に自己の自由戀愛感情を満足させるのである。この満足も束の間であつて、對者の僅少なる缺點から直ちに戀愛の破綻を來して、潔く離婚をするといふことになるのである。兩性共に自由戀愛主義者なら、それでも差岡ないであらうが、一方が眞面目な神聖戀愛論者であつ

た時には、其處に大きい破亂が必然的に持ち來されるのである。多くの社會的悲劇はこの場合に發現することが多いのである。

抑々人生の戀愛觀には二様の流れがあるやうである。一は戀愛を以て人生の最大目的と考へ、一は單に性慾の満足を以て人生の最大幸福と見てゐるのである。前者はやゝもすれば戀愛そのものを人生のロマンチックな方面に置き、後者は人生の本能的満足を是れ事とする傾向になり易いのである。吾々の理想とすべき戀愛は、必ず自覺したものでなければなるまい。そして道德的でなければなるまい。又實生活と親密な交渉のあるものでなければなるまい。實際生活と何等の交渉もない、正しい自覺を帯びない、そして道德的でない戀愛觀は早速破棄せねばならない。吾々の理想とする戀愛は、泡沫夢幻的であつてはならないし、又放縱なる動物的本能主義のものであつてもならないのである。



#### 第四節 性的愛情と生殖作用

近代の自由戀愛主義者は言ふ。

「結婚は戀愛によつて始めて生ずべきものであつて、他人から異性を強ひられて始めて生ずるものではない。かくの如き結婚は表面上體裁のよい賣淫にすぎない。個人の人格を没却するも亦甚だしいと言はねばならぬ。元來戀愛なるものは、吾々人生の最も深刻なる一部分であつて、容易く他のもの例へば金銭や門地を以て償ふべきものではない。金銭や門地などを以て戀愛に代ふべきものと思ふのは、眞に戀愛の神聖を解しないものである。世間には戀愛を以て性慾と混同してゐるものがあるが、これは甚だしい誤謬である。見よ、野蠻人には性慾があるけれども、吾々のやうな戀愛感情はないて

はないか。戀愛は人間而かも文化的人間に於て始めて現はれたものである。戀愛の遂行は、人生の最も痛切に感得する所であつて、その結果として結婚を來すもので、結婚の結果として戀愛があるのではない。それ故に戀愛によらない結婚は、忽にして離婚を來すものである。」

如何にも一面の理屈はある。然し一旦生物學的方面並びに心理的方面からこれ等の問題を考察する時は、戀愛と性慾とは決して別物でなく、むしろ戀愛の根本は性慾にあるとまで見られるのである。それ故前にも述べたやうなプレトニックの愛と稱して、必ずしも肉體上の満足を要求しない、全く高尚神聖な戀愛を主張するものもあるが、こんな戀愛は實際はロマンチックな嬉戯に過ぎず夢幻泡沫的な空想にすぎないのである。實際上そのやうな戀愛を實感し實現したのものもなく、結局は肉に陥らね



ば終まないのである。

こゝに至つて性的感情と生殖作用とは密接な關係になつて來るのである。性的感情としての性慾の目的は、全く生殖にあると言つても間違はないのである。而してこの性慾と生殖との關係をして層一層親密にするものは、第一に戀愛感情がなければならぬ。この戀愛は實に見やうに依つては、生殖の目的を遂行するための一方法手段であると言ひ得る。勿論性慾そのものも生殖を遂ぐるための手段にすぎないのであるから戀愛感情はこの性慾感情をして益々旺盛ならしむる上に於て有效であると思はれるであらう。事實上性交慾は戀愛の後に來り、而して生殖慾は性交慾の後に來るのを常としてゐるのである。

### 第三章 兩性問題

#### 第一節 兩性の起原

##### 一 研究の範圍

兩性の起原といふことについては大體二様の意義があるやうである。一つは生物界に何故に男性及女性といふものが生じたかといふことである。他の一つは兩性生殖をなす生物に於て、時に男性が生れたり時には女性が生れたりするのは何故であるかといふことである。ここでは後者の意味での兩性の起原といふことについて考察して見たいと思ふ。

##### 二 兩性の原因に關する種々の俗説

#### 性因説の濫觴



紀元前四百六十年に希臘の醫聖ヒポクラテス氏が醫學上から始めて男女兩性に關する研究をなして、その性因を知らんとし、種々考究の結果、所謂睪丸説を主張したのが、そもそも始めである。この説によれば、右側の精巢は男性を司どり、左側のは女性を司どるによつて、右睪丸から生ずる精液は男性を生じ、左側のより生ずる精液は女性を生ずるといふのである。

次いで碩學アリストートル氏はこの睪丸説を否定して、所謂精液説を主張したのである。曰く、精液はひとり男性のみならず、女性にも等しく之を生ずるものであつて、男女兩性共に各々男性的成分と女性的成分との二種の成分から精液が組成せられるものとし、男兒は父母の兩成分が等分に相觸れたる時に生じ、その相會する際の精液が、共に女性的成分であるときは女兒を生ずるのであると。猶ほ若し、父の男性的成分と母の

女性的成分と相會する時は、その分量の如何によつて、或は柔弱なる男子となり、或は女性的男兒となり、時には虛弱なる女兒となり、男性的女兒等が生ずるのであると言つて居る。

### 迷信的俗説

性因に關する説は非常に多く出て居るが、その中全く空論妄説とも見るべきものは次に示すやうなものがある。一つも確固たる根據のない迷信に等しいもののみである。

- 1 男女同衾の際、女子其右側を下にして臥する時は男子を上げ、左側を下にすれば女子を生ず。
- 2 男女の性は、性交の際の父母の熱心に比例して定まる。例へば父母共に男子を熱望して居るときは男子となり、女子を希ふときは女子となる。



- 3 早朝交合すれば男子を孕み、夕に行へば女兒を妊む。
- 4 同衾の際、父多く快美を感じる時は男子となり、之に反するときは女子を上げ。
- 5 父の勢力、母よりも強き時は男子となり、之に反すれば女子となる。更らに懷妊中男女性を豫知する俗説としては
- 1 左孕み、右孕みを以て胎内の男女を卜す。
- 2 兩親の年齢を合せて、奇數なるときは男兒、偶數なるときは女兒。
- 3 嬰兒の股に現はるゝ内側の縊れ目一本なるときは、次ぎの分娩には男兒を生じ、二本なるときは女兒を生ず。

#### 性慾の強弱に依る説

これは精神的に男女如何なるものでも設けることが出来るといふ説である。即ち性交の際、男子を熱望する父母の意思相合ふときは、男子を

生じ、女子を熱望するときは女子を生ず。然しこの精神的による性因説は未だ實驗的研究を行はれたものではない。

情慾の強弱によつて自由に男女子を上げることが出来るといふことは、今尙ほ大家によつてすら信ぜられる説なのである。

#### 卵巢説及子宮部局説

女性に卵巢を發見されたことから、畢丸説に反對して起つた説であつて性の決定は卵巢中にあるとなす説がある。即ち卵巢は畢丸のやうに左右其の性を異にするものであつて、右側の卵巢は男兒を生じ、左側の卵巢は女兒を生ずるといふのである。然しこの説は動物學上、發生學上事實無根として夥多の例が上げられてゐる。

子宮部局説といふのは、人類の子宮は、七部局に分かれてゐて、各々其の宿すところの胎兒を異にするといふのである。即ち右方の三部局は男



子を宿し、左方の三部局は女子を宿し、中央の一部局は半陰半陽の兒を宿すといふのである。

### 神佛創造説

祈願に依つて子女を得、巨人の足跡を踏みて懐妊し、靈夢の結果孕み、或は偉人豪傑の類を神佛の權化なりとするが如きは皆なこの神佛の授け子として世人が認めてゐるのである。

參籠によつて子の授けしこと等には、その裏面に深い祕密のあることであつて僧侶、神官等の奸策に出づること多きを注意せねばならない。不妊の原因は女性のみにあるのではなく、男性にもある時がある。この際他の男性と何等かの機會に於て交合すれば、必ず妊娠すること疑ひないのである。

### 三 生物學上の事實

#### 營養と性因

フィシ氏並びにホツフマン氏との大麻に肥料を多く施すと雌株が多く生じ、肥料を少くやると雄株が多く生ずるといふ實驗は、多くの人々によつて經驗せられてゐることである。又或る人はスギナの胞子を窒素肥料の少い土地で播いて見たら、雄性の扁平體を生じ、これを硝酸アンモニヤの多い所で播いたところが雌性の扁平體を生じ、時には雄性のものが次第に雌性のものに變化したといふ實驗を示してゐる。

ヒドラといふ下等動物は、食物十分なる時は卵細胞を作り、少ない時は精仔を造ると言はれてゐるし、ミジンコも同様な現象を呈するのである。又ヤング氏の如きは蛙を飼育するに、これを三區分し、一は牛肉で養ひ、二は魚肉で育て、三は蛙の肉で飼ひし所、百分比例にして一からは七十八、



二からは八十一、三からは九十二の雌を得たことを記してゐる。これは營養がよければ雌性の蛙が多く生ずるといふことを示してゐるのである。

輪虫についても營養状態の佳良な時は、不良なときよりも多く雌性を生ずるといふ實驗がある。蜜蜂についての生殖器の退化は吾人が熟知することである。

鳩は一二日をおいて二つづつの卵を産み、大抵その中一は雌他は雄であるが良く調べると、雌性の卵は澤山の滋養分を含んで居り、雄性の卵はそれに比して滋養が少いといふことである。

又或る蟹の雌に寄生虫が取りつき、體中へ枝を伸して營養分を吸収せられてゐるものが、偶々寄生虫が死ぬると、その蟹が俄に雄に變化するといふこともあるさうである。

ゼントリー氏の各種の虫類に於ける試験も亦、これと同様であつて氏は次ぎのやうに結論してゐる。

- 1 螟虫の食物不足なるか、若しくは有害なる物質を含有せる等の場合に於いては雄虫多く生ず。
- 2 秋季に至りて草木枯涸する時に生ずるものには雄虫多く、之に反して植物繁茂し、滋養多きときは雌虫多く生ず。
- 3 總じて初生には、雌雄を區別し難く、其差異は營養の如何に従つて、ほとんど晩期に至つて現はるゝものである。

ミーハン氏は、之を植物學上から觀察して、植物に於ける雌雄の區別は營養の多少に依つて定まる。即ち營養に富みて、勢力盛んなるときは、多く雌性を生じ、之に反するときは、多く雄性を生ず。と。

かくの如く生物學上の事實から母體營養説は多少學術的であるにせ



よこれを以て直ちに一般的通則とすることは出来ないのである。

### 温度と性因

カナリヤ鳥を飼育するに、食物や室内の温度の具合で、雌百に對し、雄が七十位の割合から三百五十位の割合にすることが出来るといふのは、鳴禽家の實驗談である。

輪虫に就ても、水温を高くすると雄が澤山生れ、蛙の或る種類を攝氏二十度で飼ふと産まれたる子供は雌ばかりであつたが、又他の種類を同二十七度で飼育したら、始め雌になりかけたものも雄に變じ、最後には皆雄ばかりになつたといふ實驗もある。

して見ると温度が又性別を生ずる原因であるらしいのである。然しこれも學術的通則とまでは見られない。

### 受精の時期と性因 チュリー氏の説

蛙の卵を人工受精法によつて受精させる際に、産卵後直ちに精子を與へると、暫時の間を置いて精子を與へるとして、その結果を調査して見ると、産卵後時間が長く経過すればする程、産まれる子供の雄が多く、三日も立つものならば殆んど皆雄になつてしまふことである。これによつて見れば、受精の時期が性を決定するもののやうでもある。或る學者はこの現象を解釋して卵の成熟の程度に歸し、受精の際の卵が充分成熟してゐれば、雄となることが多いのであらうと言つてゐる。

人間界でも同様なことが俗間に言ひ傳へられてゐる。即ち人間の卵巢から卵が排出する時期は、月經と月經との中間の十日乃至十五日であつて、排卵期前に受精する卵は、前回の分て十分成熟したものであるから、これは男子となり、それ以後は排卵しがけの若い卵であるから女子となる。初妊婦の産む子供には、男子が多いのは、初妊婦ではその卵が過度に



成熟し易いからである」と。

又家畜家の経験からも同様なことが言はれてゐる。即ち、牝馬の交尾期が来て、直ぐ妊娠せしめると雌を産むが、遅く交尾せしめると雄を産むことが多い」と。これ等はすべて、受精の時期によつて性別が決定されるといふ説である。

#### 化學的刺戟と性因

妊娠前に砂糖分を多く攝取しない時は男を産み、然らざる時は女を産むといふのは、一の化學的刺戟による性別の決定説である。

蛙の卵を鹽類か酸か又は砂糖液とかの中に入れて、水分を充分に吸ひ取るか又は少し乾かすと雌になることが多く、水分を増すやうにすると雄が澤山となるといふ實驗もあるから、この化學的の刺戟によつても性別を決定することが出来るやうである。

#### 四 科學的性因論

##### プロガミー説、シンガミー説、エビガミー説

(Progamny) (Syngamny) (Epigamny)

性の決定上に於ける**プロガミー説**といふのは、性因はその生殖細胞中に存在するとして、受精前に性別が決定されるといふ説なのである。即ち卵子とか精子に己に性別が存在するといふ説であつて、以後説明しやうとする染色體説等はこの説の中に包含されるのである。この説と言つても必ず確定せる通則であるといふことは云ひ得ないのであるが、その科學的方法によつて研究され、多くの實驗によつて證明せられた點に於いて、その他の學説よりも信じて可なるものである。卵子に性別が存在するといふ事例は輪虫の處女生殖の際、大卵から雌を生じ、小卵から雄



を生ずるといふことがあり、**タニ**の一種にもこれと同様の現象がある。又精虫に性別が存在するといふ實例は、**タニシ**や**エビ**の精子に二型性が見られ、蜜蜂では受精卵は雌となり、不受精卵は雄となるといふ現象がある。

**シンガミー**説といふのは、受精當時に性別が決定せられるといふので、前述の如き例がある。

**エビガミー**説といふのは、受精後その發育中外圍の影響、即ち營養、水分、溫度、化學的刺戟等によつて性別が決定されるといふ説なのである。その例は前に記したやうなものである。

### 性染色体説

染色体が雌雄性の決定に重大なる關係があるといふことは、處女生殖を行ふ生物に多く見られる。蜜蜂や蟻等では、その卵は減數分裂によつ

て形成せられ、その中の染色体は原數の半分となつて、原數を $2n$ の附號で表はすならば、この減數分裂の結果は $n$ 數となつて居るのである。この $n$ 數の染色体を有つてゐる卵が若し受精作用に合はなくて所謂處女生殖をなす時は雄を生じ、受精して精虫の有つてゐる $n$ 數の染色体と合着して $2n$ 數の染色体を有する卵からは雌が生ずるのである。

また輪虫や**ミジンコ**等に於ても、その現象が不適當である時は、減數分裂を行つて $n$ 數の染色体を含む卵を生じ、この卵が受精して $2n$ 數の染色体を含む卵胞子となると、この卵胞子が發育して雌となるのである。これが受精しないで $n$ 數の染色体を有つてゐる卵からは雄を生ずる。

**アリマキ**等の處女生殖の時にも、環象が佳良なる時は減數分裂を行はな $n$ 數の染色体を含む卵から雌を生じ、若し環象不良なる時は減數分裂をまづなし、然る後受精して $2n$ 數の染色体を有する卵を作つて、この卵



から雌を生ずるのである。

かくの如く雌雄性の決定には染色体の数が特別なる関係があるのである。以上は處女生殖の場合に於ける兩者の關係であるが、受精して雌雄兩性を生ずるものに於ても亦染色体に特別なる關係あることを見るのである。

今性染色体と雌雄性決定との關係を實例について見るに、半翅類のあるものでは、雌雄共に十四個の染色体を有し、その中雌に於ては二個の性染色体(即ち $x$ 性染色体といふ)を有し、雄にも二個の性染色体があるけれども、その一つは雌のと同じい $x$ 性染色体であつて、他の一つは之と大さを異にする性染色体なのである。この異なる性染色体を一般に $y$ 性染色体と言つてゐる。従つてこの動物の精子及卵子には、各々七個の染色体があつて卵は各々一個の性染色体を含むけれども、精子には $x$ 性染色

体を含むものと $y$ 性染色体を含むものとの二種類を生ずる筈である。

受精の際の $x$ 性染色体を含む精子と、 $x$ 性染色体を含む卵とが合着する時は、純接合子を生じて雌となり、 $x$ 性染色体を含む卵と $y$ 性染色体を含む精子とが組合さる時は、不純接合子を生じて雄となるのである。して見ると雌雄の決定は精子にあると言はれるやうである。

ウニ類に於ては、精子は何れも $x$ 性染色体を含むもののみであるけれども、其の卵の方が、 $x$ 性染色体を含むものと、 $y$ 性染色体を含むものとの二種があるのである。従つて受精の際、 $x$ を含む精子と $x$ を含む卵と合着すれば、純接合子を生じて雄となり、 $y$ を含む卵と $x$ を含む精子と組合されると、不純接合子を生じて雌となるのである。この時は雌雄の決定は卵にあると言はれるやうである。

半翅類の或るものでは、雄の體細胞及びその第一次卵母細胞には十四



の染色体があつて、その中二個は大形であつて所謂 $x$ 性染色体をなし、雄の體細胞及び第一次精母細胞には十三の染色体があつて、中十二個は普通であるが、一個だけが大型であつて所謂 $y$ 性染色体となつてゐる。雌の第二次卵母細胞が減數分裂をなして卵を生ずる時は、各々七個の染色体を有し、その中一個は $x$ 性染色体があるのである。然るに雄の第二次精母細胞が減數分裂をして精虫を生ずる時は、普通型の十二個は各々二分して六個づゝとなり、一個の $x$ 性染色体はそのどちらかに行つて、精虫には七個の染色体を有するものと六個の染色体を有するものとの二種類を生ずることになるのである。かくして形成せられた七個の染色体（中一個は $x$ 性染色体）を含む精虫と、やはり七個の染色体（中一個は $x$ 性染色体）を含む卵とが、受精によつて合着すれば、純接合子を生じて雌となり、六個の染色体を含む精虫と、七個の染色体（中一個は $x$ 性染色体）を含む卵

とが、受精によつて組合さる時は、不純接合子を生じて、成長すれば雄となるのである。

人間の染色体についての研究は、フレミング氏は一八九八年に角膜細胞に依つて二十四個を數へ、ヴェスベルグ氏は一九〇六年に精母細胞について十二個を、モンゴメリ氏も一九一二年に十二個を數へてゐる。又一九一七年にウキーマン氏は、白人と黒人との兩者について研究した結果は、何れも染色体數は二十四個であつて、男性には $x$ 性、 $y$ 性各々一個を女性には二個の $x$ 性を含むと言つてゐる。

今ガイヤー氏が一九一〇年から一九一四年に亘つて、黒人に就いて研究したことによると、女性は二十四個の染色体中四個の性染色体を有し、従つて成熟した卵の各々には、十個の普通染色体と二個の性染色体とを含んで居ると言ひ、男性の染色体は二十二個であつて、その中二個は性染



色體であつて、第一次精母細胞の分裂の時には、この二個の性染色体は一方の極に集まるから、一母細胞から生じた四個の精虫中には、性染色体を缺如し十個の普通染色体を含むもの二個と、二個の性染色体を有して合計十二個の染色体を有する二個の精虫を生ずるのである。この十個の染色体を含む精虫と卵とが合着すれば、二十二個の染色体を有する男性を生じ、十二個の染色体を有する精虫と卵とが合一すると二十四個の染色体を有する女性を生ずるのである。と。

○ **キニワルテル**氏の白人についての研究によると、男性の染色体数は四十七、女性のは四十八といふ數を示してゐる。そして男性には一個、女性には二個の性染色体を有し、男性には二種の精虫を生じ、女性には同一種の卵を生じ、その組合せの如何によつて男女性性が決定されるのであると説明してある。

要するに性別の起因に關する問題は、何れも通則とは見られないやうである。そこで今日男女を自由に産みたいとか、家畜の雌雄を調節したいとか言つても、實行上不可能になつてゐる。この種の問題は今後尙ほ深く、徹底的に研究し且つ科學の助勢を得て、最後まで到達せねばならぬのである。

## 第二節 兩性存在の利益

### 一 性別を超越した生殖法

生物界を廣く見渡すと、性別なくして盛んに生殖してゐる動植物が多いのを知る。即ち無性生殖と名づくべきもので、分裂生殖とか、發芽生殖とか、芽胞生殖とかいふものや、時には有性生殖を行ふが、環象の如何によつて、時に處女生殖を行ふもの等があるのである。そしてこれ等の生殖



法による生物がこの自然界に却つて多いのを吾々は知るのである。それから殊に不思議でならないのは、前にも一寸述べたが、ヒトデとか、ウニとか、それから軟體類、環虫類、ヤツメウナギといふやうなものは、全く人為的に、化學的、物理的、機械的刺戟方法に依つて、卵子を處置することに依り新個體を發生せしめることが出来ることである。即ちこれ等の卵の存在してゐる海水或は清水中に、カリウム、ナトリウム、カルシウム、マグネシウム等の鹽類を、種々の割合に混合して施すことや、それから又牛酪酸やその他の有機酸を加へることによつて完全に孵化させることが出来るのである。又蛙の卵を物理的、機械的に鋭い針を以て刺戟し、適度にその内容を取り出すと、受精現象をやらなくとも、完全に卵の發育を始め蝌蚪となり、後には立派な蛙になるといふことである。

これ等の事實を見聞すると、生殖には必ずしも雌雄兩性の必要がないやうである。従つて受精現象は生殖法に不必要であるとも見られるのである。

## 二 兩性生殖は種の若返り、その永續に有效

兩性の存在は雌雄兩性の受精によつて生殖せしめるために非常に有效である。この雌雄兩性の受精作用は、種の死滅を防ぐに必要であり、種の保存及び進歩のために非常に必要である。即ち細胞學の示す所によれば、細胞はその分裂によつて増殖する能力には一定の限りがある。それとその生命を永遠に繼續させるためには、時々若返る必要が生じて來る。この若返りをさせるのは即ち受精作用なのである。そして若返らされるものは卵細胞であり、若返らすものは精虫なのであると學者は説明してゐる。従つて受精作用は種の生命の繼續の要件であつと見ねば



ならない。

要するに兩性の受精作用は種に新鮮なる衝動又は變異を生ずる處理であると考へられる。そして受精は多分その種の若返りとその永續とに預つて有效なのである。

### 三 兩性の存在は生物に變異を生ぜしむるに有效

玉蜀黍は雌雄同株の植物であるから、一株に雌花と雄花とを開くのであるが普通は雄が先熟して自家受粉を防ぎ他家受粉を容易ならしめてゐるのである。或る人はこの玉蜀黍によつて毎年人為的に同株受粉を繰返して行つたところ、次第に生産力を減じ、非常に退化を示し、終ひにその退化のまま固定したが、その後、同系のものゝ花粉を加へて、受粉せしめた處、著しく生産力を昂上したといふことを記して居る。

これを見ると受精は種の進歩的變化に大切な作用を及ぼすものであることが解る。ワイズマンの言ふやうに性的生殖は二つの相反對せる生殖細胞の融合、寧ろ多分其の核のみの融合に由つて出来るのであらう。即ち生殖細胞は生殖物質を有し、これに有機體の遺傳的傾向を混合されてゐるから有性生殖の任務は、二種の遺傳的傾向を混合して、個體の遺傳的特質を生じ、新種を作り出すに重要なものである。受精によつて二個體の生殖細胞の核の融合によつて、生物は完全に最高の發達を遂ぐるこゝとが出来るのである。

植物でも動物でも性の出現した後は、生殖作用に於ける雌雄性二元主義が次第に完成される傾向に進んで居ることは事實である。これを植物界に見るだけでも、如何に自家受粉を避けることに努力してゐるかが見られるのである。見よ、雌雄異株植物あり、單性花あり、兩性花であつて



も雌雄蕊の成熟期を異にし時には特別なる自家受粉の防禦装置をなし  
 其他あらゆる手段方法を以て、この自己受精といふことを避けてゐるの  
 である。花の色、花の香は昆虫を透引して、その媒介によつて所謂交叉受  
 精を容易ならしめてゐるのである。

かくの如く、生物界では絶えず無性生殖を避けて、有性生殖に頼らむと  
 する方向を示し、又その有性生殖に於ては、出来るだけ兩性の最大懸隔を  
 要求し、兩親との差異を獲得しやうとしてゐるのである。

要するに受精作用は雌雄兩性の存在を豫想せしめ、一方には種の若返  
 りとその生命の永續を企圖し、他方には生物體の體質を改變して、種に變  
 化を生ぜしめかくして生物をして次第に複雑にし、發展せしむる手段で  
 あると見られるのである。

#### 四 兩性生殖は生物の繁殖を制限するに有効

兩性生殖は優良なる種を後代に遺すに最も適するものである。言は  
 ば一種の制限的生殖法である。

無性生殖による生物の繁殖は甚だしいものであつて、徒らに數を増す  
 のみで次第に惡質の種を後代に残すこととなるのである。従つて各個  
 體の進歩完成といふことを追々不可能ならしめて居るのである。然し  
 有性生殖では、その數を減じて、各個體に自然又は親がより多くの手をか  
 けるやうになる。その結果優良なる種を生産することになるのである。

### 第三節 生物學上から見た兩性の差異

#### 一 生物界に於ける雌雄性の兩形態



生物界には形態上雌雄の別を認めないものが多い。例へば原生動物とか、蠕形動物、腔腸動物とか、棘皮動物、軟體動物などはさうである。假令認めても生殖機官の外は、雌雄が大低似たり寄つたりの形を呈してゐるものである。然し次第に高等生物になつて來ると生殖器官は勿論、その他の體制上の差異が著しく相異を來すものである。殊に鳥類等に至つてはその差異が最も顯著なものとして見られるのである。これ等の相違は主として兩性の第二次性的特質の差異であることは勿論である。然しここで吾々は兩性の第一次性的特質が、この第二次性的特質に大影響を及ぼすものであることに注意せねばならない。

以下少しく生物界に於ける雌雄兩性の形態的差異を列擧して見たいと思ふ。

(一) 體の大き及び形

雌の體の大きいのは、多く蛇類、魚類、昆虫類、甲殻類、寄生動物等に見られ、雄の體の大きいのは、哺乳類及び鳥類、爬虫類及び蜥蜴類で觀察される。一般に下等動物は雄性がその體小さく、雌性が大きく、次第に高等動物になるとそれと反對に雄性がその體大きく、雌性が小さいのを普通としてゐる。然しこれは一般的なことではなく、その中には多くの例外のあることを承知せねばならない。

雌雄で身體の大小の差異あることは以上の如くであるが、又體形上の異つたものもある。それは一般に下等動物界に多く見られ、生物専門學者でも、別種甚しきは別屬とまで思つてゐたこともあるのである。これは主に體驅上の形態的差異であるが、鱗とか翼とか、羽毛とか鬣とか角冠、尾等の附屬器官によつて外形的差異の甚だしいものが生物の高等下等を問はず一般に多數見受けられる。



(二) 羽毛、色彩、裝飾、光

哺乳類の雄は雌よりも概して毛髪が多いのを常とし、その發達強く、その所在等も違つてゐる。獅子の鬣、山羊の顎鬚、綿羊の毛、牡牛の額に於ける捲毛等はその例である。

鳥類の羽毛は一般に雄の方が目方が重いのである。これは雄の方には特別に發育した羽毛があるからであらう。例へば土佐の尾長鷄、雉、山鳥、七面鳥、孔雀等の尾羽や、極樂鳥の雄の頭部、頸部の美しい羽毛等である。色彩に於いても、哺乳類の狒々とか擬猿類のあるものとか、牛類等では一般に雄は雌よりも強烈な色を呈し、且つ鮮かな色を呈してゐるのである。

鳥類では婚禮の装ひといつて生殖期だけ雄の羽毛色が美しくなるのや、交尾期に雄の翼の變色するのがあるが、一般には吾々も知るやうに雄の方が羽毛の色彩が鮮美なるのである。然しその反對の場合もない譯ではない。

爬虫類、兩棲類、魚類等では雌雄性によつて差程體色の變化はないが、昆虫類になると、雌雄の兩形態が豊富であつて、従つて色彩も美しいものが多い。反對の場合もあるが、蝶や蛾では雄の方が立派で一層飾られたものが多い。又兩性の翼の模様が異なるものもある。

下等動物では雌雄共に同様な色彩で飾られたものが多い。羽毛や色彩もやはり一種の裝飾ではあるが、その外に生物の雄には様々の裝飾器官を持つてゐるものがある。家鶏の肉冠、垂肉、ガレメオンの頭部に於ける角狀突起、イモリの一種の脊部に於ける鱗様物、昆虫類殊に甲殻類中には雄の頭に嚴しい器物を所有してゐるものがある。魚類にもやはり見られる。獸類の角等も武器とも見られるが、一種の裝飾であ



らう。

螢の雄の光はリズムが速かく、閃光が短かく、雌の光はリズムが緩かく震へて居り、閃光は長く、閃光と閃光との間も長いといふことは吾々でも経験し得ることである。そして雄が雌を探しに飛び廻つて居るのを、雌が草の上で又はその中から雌を見付けると雌は緩やかに光らして、その所在を知らせ、雄はその合圖によつて、雌の周囲を速く飛び廻るといふことである。螢の雌雄の區別は體形の大小からも知り得るが腹部の發光部の差異でも知られる。

### (三) 音聲及び香臭

音聲上から見た兩性の差異については、第一編中の「動物の音聲と性慾」の項の下に説述してあるから、ここには別に取り立てて記述しないが、一般に雄の方が雌よりも發聲並びに發音機官が完備して居るのを見る從

つて雄の方が多く美音の所有者であることが多い。但し生殖期並びに交尾期に於てのみ美音を發する動物も時にはある。

香臭は性別によつて異なるのが普通である。この香臭は多く皮膚の腺又は汗腺から發するもので、異性を誘引する一手段となるものである。大抵は雄の方が強烈な香臭を有し、生殖時には殊にその分泌が甚しいのが常である。嗅官の發育状態も、昆虫で見ると雄の方が一般に發達してゐる。

### (四) 武器及び抱捉器

雄が交尾期に劇烈な争闘を行ふことが多い。平常でも雄は好闘性があり、喧嘩好きではあるが、殊にこの時期は甚だしいのである。従つて彼等にはこの争闘用の武器を持つて居るものが多い。哺乳類の大形な角、鋭い牙、光れる齒等はそれである。鳥類の距、嘴等もそのために使用せら



れる。魚類にも昆虫類にも、各々武器を保有してゐるのが多い。

動物の雄には受精作用を容易ならしむるため、雌を抱捉する器官を持つてゐるものがある。哺乳類の前肢、蝙蝠、貧齒類等の飛膜及び爪、鳥類の嘴と翼、蛙の生殖時に於ける前脚、蜻蛉の雄の尾端の鈎、蟾螂の前肢の鋏蟹の爪の如きはそれである。

(五) 一般習性

雄は一般に活動性に富み積極的て行動敏捷であるが、雌は怠惰性であり、消極的で活動が鈍いのが普通である。雄蜂等は例外である。

又雄は一般に衝動強く、熱情的であり、勇氣に富み争闘を好み、排他、非群居的である。性交に於ても發動的であり、熱烈なる雌の追求者であり、全力的或は決死的である。

雌は之に反して、静寂であり、受動的である。又多くの場合雌は雄より

も長命である。

今ゲデス氏が兩性間の一般的相違として擧げてゐるのを見ると。

雄	雌
<ul style="list-style-type: none"> <li>○精子生産者</li> <li>○生殖に要する消費雌より小</li> <li>○新陳代謝激し</li> <li>○割合に一層異化的</li> <li>○屢々短命の者あり</li> <li>○屢々體の小なるものあり</li> <li>○屢々色彩立派にして飾らる</li> <li>○エネルギーの激しき爆發を起す</li> <li>○一層性急にして試験的である</li> <li>○幼者の型より更に遠ざかる</li> <li>○屢々一層變異的である</li> <li>○性慾の満足を求むること強い</li> <li>○一層争闘的である</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○卵子生産者</li> <li>○生殖に要する消費餘程大</li> <li>○新陳代謝激しくない</li> <li>○割合に一層同化的</li> <li>○屢々一層長命のものあり</li> <li>○屢々體一層大</li> <li>○屢々色彩落付き、飾りも地味</li> <li>○一層忍耐的である</li> <li>○一層固執的保守的である</li> <li>○幼者の型に一層近い</li> <li>○屢々變異性一層小である</li> <li>○一層家族を作るに努む</li> <li>○家族を堅固にせんとす</li> </ul>



これ等雌雄兩性の特質は、獨り動物界のみならず、人間の兩性に於ても一般に認められるのである。次ぎに人間界の兩性の差異について、一般生物界以外の點について考察して見やう。

### 二人間界に於ける男女兩性の差異

この項に於ける詳細なる考察は第一編中に説述しあるを以て、ここでは概括的に且つ一般的に考察することとし、生理的方面(肉體的、人類學的、醫學的)からと、心理的方面(性情)からとの二方面から總括して考察して見たいと思ふ。但しここでは一般兒童に限らず、人間としての兩性の差異に就て述べる積りである。勿論兒童期に於ける兩性の差異として見られる譯である。

#### (一) 生理的方面から見た男女兩性の差異

身長の點からだけ見ても、女性は男性よりも低く、又體重に於いても女性性は男性よりも小である。筋肉の發達は一般に男性に佳良にして、女性性は脂肪水分に富み、筋肉は甚だ少いのである。従つて力量の點から見ると男性は女性よりも遙かに強いのである。軀幹全體として見ても女性性は比較的細長く、無名骨即ち骨盤が屈曲してゐるために體は比較的に眞直ではない。女性の頭蓋は男性に比して小であつて、殊にその底部に於いてさうである。その頂上の周圍は比較的大であつて、平扁に且つ多角である。其額は比較的垂直である。腦髓の絶對的重量は男性に比較すると九對十の割である。腦髓の前頭部は男性の方がよく發達してゐるが女性は後頭部に於てよく發達してゐるのを見る。従つて下等なる中樞は女性の方によく發達して居るのを見る。灰白質の比重は女性の方が少いが、白質は格別の差がない。女性の腦髓は左右兩半よく類似し、後



頭部を除くの外、凡ての部分の廻轉は其數と深さ、共に男性は女性よりも優つてゐる。

其他毛髮について言ふならば、男性は頭髪が短いけれども、鬚髯があり、女性は鬚髯は全くないか有あても短くその代り頭髪がよく發育するものである。全身毛についても男性は一般に發生甚しく、女性は差程ではない。最後の特徴は乳房であつて、男性はこの發育少しも著しくないが、女性は極めて顯著なのである。この乳房に關聯して内部及び外部生殖器の相異なることは吾吾承知のことである。

(二) 心理的方面から見た男女兩性の差異

身體の構造及び組織が男女兩性によつて多大の差異ある以上、男性の身體にはそれに相應しい性情が宿り、女性の身體には、それに相應しい性情が宿つて居ることは必然でなければならぬ。己に吾々も知る通り、

精子の活動の敏活なる全く男性の天賦の性情そのままであり、卵子は比較的潛力を藏し、女性の萬事につけて受動的なる性情に髮靠たるものがあるのである。かく觀じ察れば、雄性の精子の大きくせられたものは男性の身心であり、雌性の卵子の大きくせられたものは即ち女性の身心であることが察せられる。

女性が精神的感受性に富むといふことは、卵子の受動的なると、女性の受動的なるとに依つて知り得べきも、女性に於いては男性に比して感受神經の發達せることは事實である。これは母性の保護上から見て實に重要なことであつて、女性が常に防禦的保護的態度に立つといふことのためには温いやさしい感性の發達が必要であるし、種族保存といふ立場から見ても、攻撃的になるよりも受動的に出て柔い感性を發露するといふことは意義あることである。



女性に反して男性は一般に理智的であり能動的である。そしてこの能動的攻撃的態度に出づるためにはどうしても冷たい理性の武器を所有せねばならないのである。若し女性のやうに温い和な感性の所有者であつたら、攻撃的精神を鈍らすばかりでなく、何等の効果もなくなつて來るのである。

かくの如く男女兩性の性情の差は、一は發動的であり、一は受動的であることは、彼れ是れ論議するまでもなく、外部生殖器構造上の差異と、生殖作用を行はんとする時に當つて、男女生殖器に起る、生殖器現象の差とを見れば自ら明瞭になるのである。

男女兩性の智能活動について見ても、男性の思想は物象を一般法則又は均齊によつて統括せんとする傾向があり、女性の思想は男性よりも具體的であつて個人的なる所に特色がある。そして女性は論理的思考は

遅いが其聯想は男性よりも敏速であつて矛盾のために心を苦しめるといふやうなことが少なく物象の分析的態度に於て甚だしく忍耐力がないのを普通とするのである。このことから例外はあるものの女性は理學者たり得るも哲學者たり得ないといふことになるのである。

感受性に富める女性が、その身心割合に疲労し易い傾向を有するのは其の血液中に水分多くして、赤血球の少いものにも據ることであるが、些少の物理的又は心的刺激にも感じ易いといふことは、その身心をして早く疲労を覚えさせるものである。

その他月經時に於ける女性の精神活動、體力の緊張味等に變化のあることは彼等をして必然的に外的活動に通ぜしめず、静坐して女性の本質を發揮せしむるやう作られてゐるのである。

それから其他の精神作用即ち感覺、判斷、理解等の點に於ても差異のあ



ることは第一編中に説述しあるを以て参照せられたい。

最後に一考を要する事項は、人類の古代の歴史に於ては、兩性は殆んど同様な生活様式をとり、従つて其の形態上、精神上、今日の文明社會に見るやうな兩性間の差異なく、比較的類似せるものであつたが、漸次進化發展するにつれて、今日見るやうに兩性間の差異は顯著となり、而して是の差異は高等なる發達を遂げたる種族に於て著しいのを視るのである。そうして見ると全く生存競争上の必要からかくの如き兩性間の差異が生じたのであると見ても差問はないのである。

#### 第四節 男女兩性の優劣論

##### 一 傳説に顯はれた男女兩性の優劣

イデンの花園で、その最初に彼の恐しい蛇に誘惑されたのはイブであ

つたとはキリスト教に見える傳説である。これで見ると女性は一般に能力の點に於いて男性に劣るといふよりは、道徳的に劣位にあることを證據立てて居るやうである。神話時代のことを見ても、ギリシヤで天界の最上神はジウスであつて、この神が人間を罪しやうとして送つた罪禍の塊なるものはバンドーラといふ女性であつたのである。これでは女性は罪惡のシンボルであり道徳上最下位にあるものと見られるのである。又舊約全書によると神が男性を土塊で作し、女性をばその肋骨で造つたとしてあるが、材料そのものから見ると女性の方は立派なやうであるが、順序から見ると男性が先造であり、女性はその男性によつて造られたことになつて居る。これで見ると男性は女性よりも先覺者であつたのである。それからヘブライの傳説によるといふと、神様が男性の身體についてゐた尻尾を見て、これは大變醜いといふので、その尻尾をお切



りになり、ただ捨てるのは惜しいといふので、その捨てるべきものを以て女性を造つたといふことになつて居る。其他、日本、支那、印度等の傳説神話について見ても、やはり男優女劣のものが多いためである。

## 二 男女兩性は互に優劣はあるが對等である

人間界に男女兩性が現實に存在する以上、男性と女性とが同一だとか同等だとかいふことは、道理上から見ても將たまた實際上から見ても無理なことであり無意義なことである。若し男女兩性同一であるとしたならば、態々自然界で異つた二つの性を造る必要はあるまい。然るに男女の兩性が確然と對立してゐるといふことは、男性には男性の必要があり、女性には女性の必要があるからである。男女兩性の存在の目的觀が全然異つてゐるのであるから、従つて兩者の行程も違つて來る。この點

からだけでも男女兩性は同一だといふことは考へられない。同等といふことと對等といふこととは餘程概念を異にしてゐる。理智的方面から見たら男性は女性に優り、感性方面から見たら女性は男性に優つて居る。其他肉體的方面から見ても各々優劣のあることは、吾々既に知るところである。劣性を優性と比較し、優性を劣性と比較して、プラス、マイナス差引して優劣がないといふことは非論理でなければならぬ。男女兩性には確かに優劣はある。それで男性の優性はこれをどこまでも發達させ女性の優性はこれをどこまでも發展させて、男性は女性の優性に尊敬し、女性は男性の優性に敬意を表するやうになつて、始めて相互の優性を充分に遺憾なく發揮し得るのである。そして男性は男性として優れた特徴を持してその最高の地位を占め、女性は女性としての優れた特質を持してその最上の地歩を占めるといふやうになつて、始めて男女兩



性が對等の地點に達したといふことが出来るのである。

要するに男女兩性は相互に優劣あつて、而も對等の地位を占めつゝ相合一すべきものであると言ふことが出来る。この合一によつて男女兩性の天分を完全に果すことが出来るのである。

## 第四章 種族發達上から見た兩性生活

### 第一節 原人の性的生活

性的本能は系統的に祖先より次第に進化して今日に至り、その間連綿として繼續してゐることを知る。而してその性的本能の發達を社會學的に討究する時は最初は、下等動物に萌芽し、それから高等動物を経て、遂ひに人類に到來したものであらう。而して人類に於ては未だ社會生活

を構成しなかつた原人から複雑な社會組織をなしてゐる文明人に及んで來たことは考へられる。即ち性的本能は個人的境地から社會的境界に進化して來たのである。

今個人的性的生活を尋ねるにまづ原人の性的生活を知る必要がある。現代人類の性慾が悉く人祖から到來し、而して人祖の性慾は動物に起因するものとすれば、原人類の性慾は動物界の性慾と等しく、従つて動物の性慾を知ることによつて、ほぼ原人類の性慾を推知することが出来るであらう。多くの學者の研究によれば、原人の性的生活は、動物界の性的生活と何等異なる所なく、性交行爲は到る處に公然と行はれ、男女とも裸體のまま行動しても何等不思議でもなく、何等恥ずる處もなかつたといふことである。この原人型の性的生活は今尚ほ原始的階級の野蠻人間に見られるのである。彼等の男女關係は動物のそれと何等變るところな



く、性交は親子間を問はず、兄弟姉妹叔姪間を問はずに遂行され、その場所の如きも森林たると道路たると、その所を選ばず犬猫、同様隨處に行はれ高等人類に見られるやうな貞操觀念等はなく、女性は一の動産であり、交易、贈與の對象物であり、全く肉慾遂行の一道具たるに過ぎないのである。偶々性的生活の際人目を避けるやうなことがあつても、それは純な羞恥心からではなく、他人から妨害されなためからであつたのである。彼等は稀に木の葉や布片を以て陰部を型ばかり掩ふやうなことがあるものの、それは時々文明人に遭遇する蠻人間に見られる現象であつて、一般には掩はないのである。彼等には吾々の感ずるやうな猥褻といふ觀念は全然ないのであらう。

これ等原人型の蠻人に於ける性的生活が、吾々の人祖にもあつたといふことは確然とは斷言し得ないであらうが、然しいくらかは據り所あつての推論であると見られる。要するに原人型の蠻人間に於ける性的生活は、吾々文明人のやうに、理想化せられた性慾とはなつてゐないのである。即ち原人時代に於ける動物性本能と同一なる性的本能であると言ひ得る。

## 第二節 人類の進化と性的生活の理想化

人類は原人の生活を脱して遊牧生活をする人間となり、それが次第に進展して一定の土地に土着して、彼等の郷土を作り、家屋を建設するやうになつた。従つて家庭の仕末をする人間の必要を感じて、その主役には必然的に女性がなつたのである。これが現今の妻妾の起因と見られるであらう。何ぜ然らば男性がその主役にならなかつたかといふに、それは前述せる男女性の優劣から必然的に男性は外的活動に従事し、女性は



内的活動に従事するやうになつたのであると推論することが出来るのである。

最初はこの妻妾は盛んに貸借交換せられ、賣買、擔保の具とせられ、若し男性の意に従はなかつた時は、これを打擲し、撲殺までしたのである。この風習は古代希臘人の間にまで行はれたといふことである。碩學聖人たるソクラテスまでが尙ほこの域を脱せられなかつたといふことであるから、當時の一般人の性的生活は推して知るべしである。女性はいかゝの如く奴隸又は一物品として扱はれ、全く男性の性慾満足の具に過ぎなかつたのである。

この状態の性的生活から次第に進化して理想化せられた性的生活即ち一夫一婦の生活を行ふやうになるまでは多くの階段を経過して來たのである。人類學者リュウイス・モルガン氏の説によれば、次ぎのやうである。

ある。

第一時期……亂交時代。

第二時期……半血族亂交時代。——親子間の性交禁ぜらる。

第三時期……一時的な一夫一婦時代。——離合自由自在。

第四時期……一夫多妻時代。——男權確立、女性虐待。

第五時期……一夫一婦時代。——理想的性的生活、男女性對等。

### 第三節 性的感覺の進化

動物的性本能が、嗅覺、觸覺、聽覺、味覺等から刺戟せられて、觸發せられるやうに、人類の知能の進化しなかつた原始時代には、この動物的行爲と大差はなかつたのである。然るに人類の進化と共に、性的觸發は主として視覺を媒介とするやうになつて來たのである。従つて、嗅、觸、聽、味等の諸



感覺の範圍が縮少せられ、視覺の範圍が非常に擴大せられて來て、人類をして動物の屬性から次第に脱却させて種々の審美感覺によつて直接間接に性本能を觸發させるやうになつて來たのである。

原人又は野蠻人間に於いては審美感覺薄弱なるため、この感覺を以て性的本能を觸發すること困難なることから、外部生殖器を露出して異性の注意を惹くやうに努力したのである。局部に裝飾を施すといふのはこの注意喚起の一動作に過ぎないのである。野蠻人間には現今に於てさへこの風習のあるのを見るのである。文明人間の局部隱蔽もやはりこれから源して居るのであらう。或る學者は次ぎのやうなことまで言及してゐるのを見る。即ち、性的機關は身體の中央部にあたり、異性の注意を引くには、異性の眼を下部に向けさせる必要がある。殊に女性の局部はこれを外面から觀察する事が甚だ困難である。そこで自然性的機關

によつて異性の注意を引く事が廢れて行つて、異性と相對して直ちに其の注意を喚起し易い部分即ち胸部若くは頸部、頭部、顔面等に裝飾を施すやうになつた。これが即ち衣服の起原であると共に紅粉を用ゆるやうになつた原因である。日本婦人の裾模様が異性の注意を身體の下部に向けさせようとした目的から生れたものであることは、この理で説明する事が出来る。

異性の注意を直接性的機關に導かなくとも、間接に異性の性的感覺を刺戟し又は連想作用によつて注意を十分喚起し得るやうになつたといふことは、人智の發達が想像作用の發達にあると見ることから解釋が出来るのである。

代々累積された經驗から、間接的に感覺を刺戟されて、充分に性的慾求を起し得るといふのは文明人の特質であらねばならない。



#### 第四節 文化と性的生活との進化的考察

女性を一個の道具視し、男性と對等の地位に置かれなかつた時代は、單なる官能的性感情であつたのであるが、文化の發達と共に女性は男性と對等の地歩に進められ、これを道具視することなく、女性は男性の求愛の對象となり、官能的性感情に加ふるに道德的感情を以てせられ、そして男女兩性相互に精神並びに肉體的に優越點を發見し、それを認容し、ここに美しい戀愛感情を生み出したのである。

ここに戀愛並びに性的行爲の單純性を産出し、貞操觀念の確立となり、女性は自己の愛する男性以外には身も心も許さないといふ性的忠實の發現を見るに至つたのである。性的忠實行爲の發現は更らに更らに童貞羞恥、節操等の諸感情の發展を促し、文明人は精神的に物質的に他人類

よりも優越性を獲得するに至つたのである。

佛教の「女人は罪障多し」とか、孔子の曰く「女子と小人は養ひ難し」とかいふことは、現代文明人には許容されない道德となつたのである。然し親鸞や孔子がかくまで女性を卑下したことは、當時の時代相に映して見ねばならない。憶ふに當時は道德的退化の時期であつたらう。道德的退化は必ずその裏面に性的生活の紊亂無秩序がある。これを救濟するためには、どうしても女性を卑下せねばならなかつたのであらう。

性的生活はかくの如く一面文化的進化をなすと共に、他面審美的發達を著しく示してゐる。見よ現代のロマケチツク文學は戀愛を純美高雅なものとなし、多くの歌人詩輩は、醉陶的に戀愛を謳歌し、讚美し、絶叫してゐる。そして性慾對戀愛の色彩が明確にせられ、兩者全く別物の如く吾々に指示してゐるのである。然し最後は戀愛と性慾とは、眩暗に迷はね



ばならなくなりここに幻滅の悲哀を遺憾なく暴露するに至つたのである。戀愛は性慾の美化されたものであつた。戀愛の科學的研究は結局性慾の科學的生物學的研究の補助を得ねばならなくなつて來たのである。

## 第五章 兩性問題から見た遺傳

### 第一節 遺傳の意義

“The Production of like by like” “類似によつて類似を生ず”と云ふことは遺傳そのものを生物學的に定義した言葉である。然しこの術語は人類學者や、養畜家、園藝家等に使用される時には餘程限定されたものとして發表されてゐる。即ち單に種族上の類似の點のみならず、同種族中種々

の異屬を分化せしむる所以である微細な特質をも含めて言つてゐるのである。されば一般に見るならば遺傳とは、生物の形質を現はすべき素因 (Predisposition) が親から子に傳はることであると言ひ得やう。かく廣狹兩意義があるが、その根本的現象及原理に於ては兩者同一である。即ち雌雄の細胞が結合して、微細なる新細胞を形成するや、その細胞が漸次發達してその遠祖近祖に類似せる一の生物となるが、それは全然何れにも類似してゐないといふことになるのである。

この遺傳現象を人類界に見るに、人間の特質は父母兩系の細胞の結合によつて規定せられるのみならず、その環象の如何にも多く支配されるものである。この環象の影響は胎兒期に始まり、人間が成熟期に到達するまで受けるのである。この環象の影響から得た兒童の特質を遺傳の結果と見るのは、不當であるが、往々この特質をも遺傳として見て居るこ



とがある。

科學的に眞の遺傳を定義するならば、遺傳とは二つの萌芽細胞の結合の結果として生じたる特質のみを言ふと定義されやう。

## 第二節 人間界に於ける遺傳の一般的

### 事實及び理論

一人類の遺傳にはどんな傾向があるか

雌雄兩細胞が相結合して、新細胞を作り、これが次第に發育して人類の胎兒を形成するのであるが、その雌雄兩細胞は吾々が顯微鏡下でなければ識別することが出来ない程微小なるものである。かくして生じた人類の胎兒は他の動物のそれと殆んど大差がない。然しその中に潜在してゐる特徴は已にその兩親種族、國民家族等のすべての特徴特質を併有

してゐるといふことは自然及び人生の一大不思議でなければならぬ。他動物と差別のない初期の胎兒が進展して吾々の如き萬物の靈長となることは全く謎のやうな事實である。

さてかくして生れた子供と兩親との間に如何なる遺傳傾向が表はれるかと云ふに、次に擧げるやうな事が見られる。

一 子供は常にその兩親に類似する

多くの子供は兩親の特質の混合よりも、その一方の親の特質をよく表はすものである。然し全然、父に似たり、母に似たりするものでもない。又兩親の特質の總和でもなく、兩特質を等分に混合したものである。

二 遺傳の素因は單に父母より受くるのみならず、又父母の祖先の兩系よりも受けることが判る。

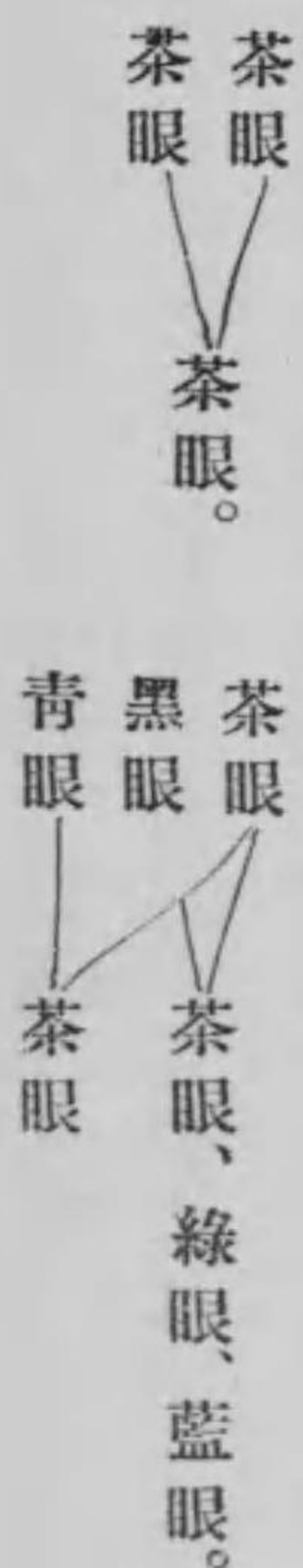
このことは次ぎに節を代へて、ガルトン氏の祖先遺傳の法則に於いて



詳説するから、ここでは略する。

三人類の遺傳は正常の模型に還元せんとする傾向がある。

兩親共に正常の原型を脱する時でも、その子供は常に兩親程に變化を現はすものではない。幾分か正常の原型に還元して表はれるものである。この事實は後天的・一時的素因は割合に子供に遺傳しないといふこととなるのである。然し素因の優性劣性によつて、その表はれが色々に異つて來ることは次ぎの事で知られる。尤もこれは身體形質上に顯れる遺傳傾向であつて、眼の虹彩の色等は略ぼメンデルの法則によつて決定せられ、茶眼は優性、黒眼、青眼は劣性であるからその結合は次ぎのやうになつて現はれる。



又毛髪の色でも一般に濃色は優性で、淡色は劣性であるが、その遺傳は複雑である。毛髪の色では捲縮毛は優性、直毛は劣性であつて兩者の間の子供は波毛状となるといふことである。

皮膚の色でも黒色は白色に對して優性であるといふ。

身長の場合には、その遺傳の様子は甚だ複雑であるが、身長は兩親に關係するのみならず、父母兩系の祖父母に著しい關係があるといふことである。そして一般に短身は長身に對して優性であるさうである。時としては畸形、短指等も遺傳することがあるのである。

これ等のことは精神的形質の遺傳にも適用し得るが、兩親揃ふて聰明なるもその子供は差程に聰明でないといふことがある。又無能なる兩親の子供でも非常に堪能な場合があるから一概には言はれないのである。この知能技能の遺傳については、統計的、系圖的研究があるが、正確な



一般的ものとは見られないのである。

四 しばしば特殊的能力に於てせずして、むしろ一般的能力に於て遺傳するものである。

個人の有する知能は、遺傳的即ち生得的精神能力と、後天的即ち教育とか経験によつて得た精神内容との合成して居るものである。後天的精神内容も遺傳研究上重要なものであるが、遺傳上最も重要な作用をするのは先天的精神能力である。この先天的精神能力でも特殊のものも一般的のものともあるだらうと思ふ。この兩者のものゝ中遺傳現象では特殊的精神能力よりも一般的精神能力の方が發現すると言ふのである。例へば大文學者の子供にして大科學者となることがあり、大科學者の子供にして往々大政治家大實業家等となることがあるのである。これ大文學者としての特殊能力や大科學者としての特殊能力等が遺傳せずし

て、只だ凡人に優れたる非凡の能力の一般的感受力が遺傳したものだと思はれるのである。

五 虚弱者の近親結婚に依つて生ずる或る弱點は新に發現するのではなくて既に兩親の中に存在して居つた傾向なのである。故に近親結婚の累積によつて單に弱點の増加するのみならず、一方では其の強點も亦均しく保存せられ或は増殖せられるものである。

六 純血なる兩親の子孫は、往々その血統の幾代か前の先祖の特質を發現して來ることがある。

この現象は所謂 *Atavism* (隔世遺傳) と稱するものであつて、血統の全く懸け離れた兩親の間に多く見られる現象である。この實驗調査は家鳩や馬と驢馬との雜種等で行はれて居る



七 遺傳的素因は生後直ちに總べてが發現するものでない。本能と同様發達の各時期に於て現はれ、特に春機發動期に於て著しく現はれ易い傾向がある。

生理上又は精神上の遺傳的病痾が、殆んど兩親と同年齢時に於て發生することや、兩親の生理的容貌や心理的道德的性情が屢々この春機發動期頃に於て突然發現すること等で證據立てられるのである。

二人類の遺傳に於ける一般的理論。

一、ワイズマン説 (Weismannism.)

アウグスト・ワイズマン (August Weismann) は西曆一八三四年の生れてあつてその唱道する遺傳説をワイズマン説といふのである。この學説は全く新ダーウキン説の上に建設されたものであつて、進化の諸現象は、全

く自然淘汰にのみよつて生ずるとし、之がために生殖質の連續を説いたのである。生殖質といふのは生物體を構成してゐる物質ではなくしてその體内に生ずる生殖細胞を形成せる物質であるとし、遺傳現象の發現するは生物の生殖質によるものであつて、身體を構成せる形質の遺傳するのではないと主張するのである。されば身體の受けたる性質は假令どんなものであつても、之を其子孫に遺傳することはないのである。例へばワイズマン氏は鼠の尾を傷け、其子孫に於ても同一局部を傷けて實驗したのに、幾代を経過するも斯の如き傷を或る子孫に於て遺傳することのないのを見たのである。この實驗から氏は後天的特質は遺傳しないことを主張し、兩親の生活上に起つた變異は、その萌芽細胞を變化して子孫に影響すべきものでない。總ての兩親は遺傳せられたる特質を遺傳するのみであつて、彼等自身に習得したる性質は遺傳するものでない。



としたのであるが、後年に至つて氏も亦斯くの如き後天的特質も遺傳することがあるべしと信ずるに至つたのである。

今氏の生殖質の構造について略説するに、生物の有する生殖質は其の物理上及び化學上の性質と、數多の基本成分とにより、發達の能力頗る著大である。基本的成分とは生活單位であつて、生活力を有し、盛に増殖し適當の刺戟の現はるゝまでは、毫も活動せずして、體内に潜在して居るのである。そのために細胞の増加する際には、單にその中に内在するに留まるのである。而して生殖細胞なるものは、單なる一有機體であるばかりでなく、諸種の有機體或は單位(ワイズマン氏の所得 Microcosm「小宇宙」)の集合より成るとし、生殖細胞なるものを以て更に初等階級なる生活單位の集合であるとしたのである。是等の生活單位の生物體に於ける關係に就ては、更に巧妙なる説明を考案してゐるのである。

生物は二形を有する生殖細胞即ち卵子と精子の結合に其源を發し、是より發して生物となるのである。此等の生殖細胞は受精作用を受けた卵子の反復分裂せるために生じたものであつて、終に父母兩親を生ずるに至る。此等兩親には其の源たる受精作用を受くる卵子に於ける體制を具備し、斯の如き體制を持ち運ぶものは、核中の染色する物質即ち生殖質である。此の生殖質には種々の染色體、即ちイダントと稱するものも有し、其一イダントを取つて見ると、數個の小片、即ちイドと稱するものから成り、そのイドの各々には、將來生物となるべきものゝ凡ての特質即ち其屬する屬種及びその個體の特徵を保有せるものと考へたのである。これは勿論一つの假説であつて、事實上然りといふのではない。その深い所は固より想像に過ぎないのである。是等の想像説を述べて見ると上述のイドは各々幾世代の間に精巧に作り上げられた構造をもつてゐ



る小宇宙であつて、此等イドの各々は數多のデテルミナントから成り、生物の發達成長する際、其の各部分に一個のデテルミナントを有し、是によつて他と獨立に變化することを得、或は發達の際他と關係することなくよく發達することが出来るのである。此のデテルミナントは更に若干の生活分子即ち *Piophor* 生體から成り、此の者は生治體に於ける基礎分子と云ふべく、胚時代の種々の細胞中の細胞質に遊離するに至るのである。

之を要するに此等種々の階級の組成部分は成長するの能力を有し、尙ほ分裂によつて増加するものであるとし、遺傳を生ずる物理的基礎即ち生殖質は、生殖細胞の核内に存する染色質中であつて、其の染色質は一定數の染色體即ちイダントより成り、このイダントはイドから成り、このイドは更に數多の基礎的組成分子即ちデテルミナントから成り、デテルミ

ナントは更に若干の擔生體から成るのである。この擔生體は極めて微小の生活單位であつて、これは數多の化學的分子から成るとするのである。

### 二、メンデル説 (Mendelism)

グレゴール・ヨハン・メンデル氏 (Gregor Johann Mendel) は、西曆一八五五年から同一一八六五年までの間に豌豆其他の栽培植物について、其遺傳現象を研究し、大體次ぎの如き結論を得たのである。

#### 第一支配の法則 (Law of Dominance)

雜種には優性劣性なる現象があつて、一方の親に似るも、他の親に似ないこと、即ち優性は劣性を支配して現在性となり、劣性は潜在性となること。

#### 第二分離の法則 (Law of Segregation.)



雜種二代目に於ては、一代目に潜在せるものも出現し、兩親の形質に分離して、一定數の割合に現在性となること。

### 第三各形質獨立の法則 (Law of independent unit Character.)

二對以上の對の形質ある場合には、甲の形質は乙の形質に關係なく、別々に分離し、獨立に行動するものである。

近來學者の研究によつて、このメンデル法則は益々基礎付けられ、遺傳學上一大貢獻をなしてゐるのを見る。これを詳細に説述する時は、實に面白いものであるけれども、ここでは概観するだけに止めておく。

要するにメンデル氏の事業中最も顯著な業績は、生殖質は純粹にして決して混同することなしとしたことである。メンデル説を一に分離説と稱するの理は實に爰に基くのである。即ち一器官が兩親に於て其性質異なる時、此等の兩親より生ぜる子に於ては、其子に存在する其器官の

性質は兩親の兩性質を共に現出するのではなくて、此等兩性質中只だ優性のみ現はれ劣性は體內に潜在して現はることがないとし、然し是から生殖質を生ずる時は、優性劣性各々現はるものとしたのである。

### 三、ガルトン説 (Galton's Law.)

遺傳に關してフランシスガルトン氏 (Francis Galton) の創設した法則であつて、一に之を (Galton's Law of ancestral Inheritance) 「ガルトン氏の祖先遺傳の法則」とも言つてゐるのである。

氏の稱道する遺傳法則は統計的研究になるものであつて、即ち爰に或る一生物あつて、其先天的に父祖から受けた特質を考へれば、父親から二分の一、母親から二分の一を受けたものであつて、是等兩親は更に其の兩親の特質を二分の一宛受けてゐるものであるから、即ち祖父祖母は各其孫の特質の四分の一を形成することになるのである。更に曾祖父、曾祖



母は各其曾孫の特質の八分の一を形成することになつてゐるのである。斯く遠く祖先に追究することに依つて凡て、血統を有する祖先は皆其子孫の一部を一様に形成するものであると言ふのである。是を今式に表せば、

$$\begin{aligned} \text{子の寄与} &= \frac{1}{2} + \frac{1}{4} + \frac{1}{8} + \frac{1}{16} + \frac{1}{32} + \dots = 1 \\ &\quad \text{(父母)} \quad \text{(祖父母)} \quad \text{(曾祖父母)} \end{aligned}$$

そこで父母の特質を考へると次ぎのやうになる。

$$\text{父母の寄与} = \frac{1}{4} + \frac{1}{8} + \frac{1}{16} + \frac{1}{32} + \frac{1}{64} + \dots = \frac{1}{2}$$

かくしてガルトン氏は、犬の系圖記録を材料として、其毛色を研究したところが理論上の豫期せる所と一致するのを見たといふことである。

その後ピアスン氏の調査によると、子と親との相関係数は〇・五、祖母との相関係数は〇・三三、曾祖父母との相関係数は〇・二二であつて、他は

之に準ずべく、随つて子の特質中には、両親から〇・六二四四、祖父母からは〇・一九八八、曾祖父母からは〇・〇六三〇の割合に遺傳質が傳はるものであるといつてガルトン氏の説を訂正してゐるのを見る。

### 第三節 遺傳から見た近縁結婚

#### 一 近親結婚は害があるか無いか

動物界で實驗せられた一例は、鼠の近親結婚である。これに依ると多くの實驗はその生産力の減少減退を示してゐる。又同時にその天死をも示してゐるのを見る。海鞘の實驗でも同様同じ個體から出た二個體を結合せしめると、別個體のに比して、その發育が九割減少し、一割しか成熟しなかつたといふことも擧げられてゐる。

然しある學者の實驗報告は近親結婚でも決して有害ではないといふ



ことを示してゐるのを見る。即ちドラソフィラといふ一種の蠅は幾代近親結婚を續けても劣化する現象がなく、又鼠の實驗でも同系のものを數十代繼續交尾させても決して劣化しなかつたといふ實驗もあるのである。

これを植物界に見ても、稻、麥、豌豆、いんげんまめ、煙草、スミレ、鳳仙花等といふ植物は常に自家受精をやつてゐても、完全に結實し、立派にその種子から發芽してゐるのを見るし、それかといつて、蘭とか、櫻草とか、ミソハギ等の一般植物では殊更らに自家受精を妨げる装置がしてあり、むしろ他家受精をなすに便利なやうにしてゐるのを見るのである。そしてこれ等の他家受精をなすやうに作られてゐる植物の花に自家受精を行ふとその子孫に不良の結果を來すことは多くの人から研究もされ實證も上げられてゐる。

### 二人類界の近親結婚

古來近親結婚を續くる時は、其の子孫が繁殖力衰退し、その體質虛弱となり往々畸形兒等を生ずるといふことが信ぜられてゐたのである。又其他の惡質の遺傳例へば聾啞、癩癰、白痴、癩癩、天死等が發生することがあるといふことも統計學上から證せられてゐるのも見るのである。統計學上では更らに近親結婚によつて生じた子孫間には犯罪者多く精神薄弱者も多いといふことを示してゐるのである。然しこれ等は人類界の近親結婚に於いても動植物界のと同様害があるといふ方面の調査があつて、その反對に決して害はないといふ研究調査もあることを忘れてはならない。或は却つて無害であるといふ方の例證が多いかも知れないのである。



米國のヘミス氏は八三三組の近親結婚の夫婦間に生じた子供の統計を示してゐるのを見るに、三九四二人中、癡疾者二八・七%、聾啞者三六%、盲者二・一%、白痴者七%、畸形者二・四%、夭死者二二%、癩癰者七・六%、癩癰者二・四%、あつたといふことを述べてゐる。然しその反對の事實も多く見られるのである。例へば我が國の越後の三面村、飛彈の白川村等の研究は何れも惡質を生ぜずに極めて強壯な體質を維持して居るのを示してゐるこれ等のことから考へて見るに、惡質系統を混じらない近親結婚は不良の結果を惹起しないといふこと即ち優良なる子孫間には劣化は生じないといふことが結論されるであらう。

要するに遺傳學上から見ると、近親結婚は有益なこともあり、又有害なこともあるのである。兩者共に優良の遺傳質を保有するものであつたら、その子孫は假令近親結婚なるにもせよ、優良な子孫を生ずる筈で

あり、若し惡質の遺傳物を保有する近親結婚の兩親からは惡質の子孫が生ずるといふことになるのである。この實例は畜産家、養鶏家等からどつさり提供されてゐる。然しこれ等動物界の事實から直ちに人類界にもかゝる近親結婚を奨励することは道德上或は社會の習慣上顧慮せねばならない重大問題である。遺傳學上から見ると、惡質の潜在といふことがある。たとへ表面上善質に見えても、何時如何なる時潜在してゐた惡質が表はれないとも限らない。近親結婚によつてこれ等潜在してゐた惡質が突然現はれて來る時が多いのであるから、我々は決して安心出來ないのである。

優生學上から見ると、善良な遺傳質を保有する者同志の結婚は甚だ望ましいことになるのであるが、吾々がそれを目當にして結婚することは非常に冒險である。



## 第六章 父母本能

### 第一節 父母本能とは何ぞや

父母本能といふのは、子を産み且つ之を保育愛護するすべての先天的傾向を云ふのである。更らに方面を違へて考察するならば、廣義に於ける性慾とも見られるであらう。即ち性慾といふのはこれを廣義に解するならば授精當時に於ける性的要求のみを言ふのではなく、子孫を保護し愛育するといふ性向までも含めて言ふのであるから、完全な種族保存慾として見られるのである。親が子を教育するといふことも、つまりは性慾の發動と見られるのである。

元來兩性生殖は、小數の下等動物を除外せばすべての動物界に常に行

はれる法則なのであることは、これまでの説述によつて知り得ることである。而してこの法則は現存せる總べての種族に於て必要缺くべからざるものなるを以て、我々人類に於いても幼少な時代から既に父母本能の發現を見るのである。

### 第二節 父母本能の必要

一代限りで絶滅すべき動物の状態を見るに、兩性の區別なく、只だ分裂蕃殖をなす所の下等動物は例外として、自己保存の本能以外に他の本能殊に種族保存本能を有しないことが多い。種族として生命の流れを全うしなければならぬとせば、多くの動物は自己生存の安全保育を期すると共に、其の子孫の生産及養育を促がす本能がなければならぬ筈である。



生物には單にこれ等自己保存本能と種族保存本能とが並立してゐるのみならず種族によつては、或る時期に限つて父母本能が個體本能に勝ることがあるのである。種族保存のためには、兩様の本能が発現してゐるのを見る。一は多産動物の本能であつて、一時に數十萬の子孫を生産し、それを好都合の場所に産み分けるといふ本能の所持者、魚類、昆蟲の如きものであり、他は哺乳動物や鳥類等に見られるもので、幼者を殊更らに愛撫保育するといふ本能の現はれである。これ等高等動物に於ては、毎年數個の蕃殖をなすのみであつて、その幼者は極めて無能なるにも拘らず、最も複雑で而も危険なる環象中に成長し得るといふのは全くこの保育本能があるためである。

かく高等動物に於ける子持ちの動物は自己の食物を割愛して其子に與へ、且つ其子を養ひ、又は教ふためには自己の生命をも惜まぬといふ犠牲的精神の發露さへ見るのである。實にこの本能あつて彼等はその種族を安全に永久に保存し得るのである。従つて幼者のために準備し、又幼者を産出し、且つ養育することを第一目的としてゐるすべての行爲は之を父母本能と見ることが出来るのである。この本能あるを以て、種族は永遠に繼續することが出来るのである。

### 第三節 父母本能の正當なる發達を遂げしむる方法

一 過度又は不正當なる發達を防止すること

父母本能の顛倒せる發達は春機發動期に於いて發生することが甚だ多いのである。



生理的方面からこの事實を見るならば、或る身體上の缺陷のために、兩性の興奮又は破壊を起すことがあるのであるから、この時期に於ては殊に種々の方面に注意して、正當なる父母本能の發達を促さねばならないのである。

この時期に於いて徒らに父母本能を發現させる生殖器の刺戟を與へたり、性的に發育せんとしつゝある彼等に、兩性の區別なき程の行動をやらしたりすることは、ややもすればこの父母本能の正當なる發達を阻害するものである。小學校の幼少なる兒童に對してはむしろ兩性の區別を意識させない位に好同伴たらしむるため男女共學等は尤も意義あるものであらうが、春機發動期に達した兒童をして兩性の區別を意識させるや否やの問題は未だ未決の事柄であるが或る學者は、兩性の發達は兩性互に隔離せられるよりも、寧ろ相會すること多い程正當なそして健全

な發達をするものであると言つてゐるが、これも一概に然りと斷言はなし得ないのである。

### 二意識中に於ける不都合なる聯想を拒避すること

實際的價值を有する最も重大な問題は、この父母本能の衝動と如何なる意識とを聯想せしむべきかといふことである。

彼等の聯想は時に下劣卑猥なることも、又高尚優雅なることもあるであらう。これ等の聯想から引いては個人的肉慾を刺戟することともなからうし、又反對に他愛的信頼、社交的服從等といふ高尚なる道徳性を涵養することにもなからう。

これ等の事柄は、兒童に如何にして兩性機能の知識を與ふべきかといふ刻下の問題と密接不離の關係をもつものである。依つてこの事につ



いては、更らに後章に於て論議することとして、此の問題については、他の多くの本能と同様其の作用を開始する時から徐々に、而も自然的に、之を意識せしめることが最も當を得た正しい處置であると思ふのである。

## 第七章 母性

### 第一節 母性の進化

一言にして云へば、母性の進化は、原始的植物細胞が發芽した時から始つて哺乳類の發現に至つて遂に完成されたのである。

憶ふに母性をこの自然界へ生ずるといふことは、少くとも自然界進化の最大目的の一つであつたに違ひないとヘンリー・ドラモンド氏が言つてゐるが、確かにさうであつたらうと考へられる。以下しばらく同氏の

母性進化論をたどつて見たいと思ふ。

眞の意味に於ける母といふものは、哺乳類に至つて始めて出現したものである従つて吾々の所謂哺乳動物といふことは、即ち母なる概念に抱括され得るものである。勿論母なるものは下等動物にも、不完全に存在して居るが、哺乳類を生じて始めて完全な母を生じたのである。この哺乳類を生ずるまでは、自然界は絶えず、此の母なるものを完全にしやう完全にしやうと努め、古きを捨て、新しきを採りつゝ、漸次改良の歩を進め來つたのである。かくの如く全植物界全動物界を通じて母性の出現を其目的としてゐたといふ事實は、如何に母性(女性)なるものの貴重なるかを示してゐるのである。

蓋し原始時代の動物は母の配慮を受けなくて、生れると直ぐ、自ら養ひ自ら育ち得るやうに出來てゐた。思ふに彼等には物質的母性は確かに



あつた。従つて生理的の母はあつたのである。然し彼等には心的母心は認められなかつた。ために子を愛する母はなかつたのである。彼等は生れて世に出づるや、直ちに獨立し、母には直に忘却されたのである。思へば最初の自然界は愛のない荒涼寂莫たるものであつたらう。

原始時代ばかりではない。其の後も依然としてこの事實には變りがなかつたのである。見よ、下等動物には卵の孵化する頃は、母親はもう死んでゐるのが多い、又子を生んで直ちに死ぬ者もある。動物の無常と言はむか、人生のそれ以上のことがあるのを見る。それかと思ふと、又卵に對し充分配慮があつて、卵を正しき場所に置き、天候の害を防ぎ、敵の來襲に具へ、食物を多量に準備してゐるといふやうに、其極點にまで至つてゐることがある。かかる場合には、生理的母性は完全に到達して居るのである。ここまで言つて氏は面白い例を引いて居る。即ち蝶は卵を其の

好みさうな葉の上に生みつけて、卵のために計ることが眞に完全である。惜むらくは蝶はこの卵が孵化する前に死滅するのである。若し生きて居て、毛蟲青蟲がこの卵から出るのを見たら、蝶はどうするだらう。果して之を我が子として愛育するであらうか。こんな醜いものは厭だといつて、構はないに相違ない。事實は確かにその通りである。其生理的構造かあまりに異つてゐて、養はうとしても養ひ得ないであらう。と。

更らに論旨を進めて、氏は茲に生理的母性は完全であるが、心的母心は少しも認められないと言つて居る。子の世に出づる頃は、母はもう死んでゐる。これではどうしても母心はあり得ないのである。

下等動物界に母の配慮のない理由は此の外にもある。即ち彼等は一時に幾千幾萬の子を産む故に、とても母がその子のために平等の配慮はなし得ない筈である。一匹の子を産んで之を養育するよりは、多數の子



を生んで之を自然に放任するが、好都合なのであらう。自然は子を養育する母を生ずるよりも、多數の子を生ずる方が幾十倍も樂なのであらう。この時代には唯だ卵に對する母の配慮に母心的本能の初現を見るのみであつて、この現象には何等倫理的意味もなければ、愛の表現もなく、愛の働く機會も時も對象もないのである。

## 第二節 植物界に見る母性の表現

母性は生物界の初現にも不完全ではあるが存在してゐたことは、前節に於て大體述べた所であるが、今この母性の初現を植物界にとつて見るに、勿論植物界の母性は吾々の人類の所有するやうな完全な母性ではなく、一の生理的母性と見るべきものであることは承知せねばならないが植物が無花植物から有花植物へと進んで來るにつれて、この生理的母性

はそろ／＼發現して居るのを見るのである。彼の植物が深い注意を以て種子、乾果、果實等を生じ、外被を重ねて之を保護し、後日のために食物を以て之を蔽ふてゐるのを見る。吾々がこの配慮努力を母性の發顯と考へて、正しいか正しくないかは別問題として、兎に角植物界でもその子孫のためには無意識的に、相當の準備をなし、不思議な装置をして居ることに氣付くのである。

實例を以てこれ等の状態を示すに、有花植物即ち顯花植物が開花するや、受粉作用を完全にせんがため種々の装置を表はし、他花受粉の便宜を謀り、自花受粉を防禦するが如き、又一旦結實するや種子の充分成熟するまでは、或は色彩を以て、或は有毒物を以て、或は機械的の防禦器官を以てその種子を保護し、かくして充分成熟するや、再び色彩や、味や、機械的器具を以て、これが分布に努力し、又は種子に與ふるに多量の養分を以てする



が如き、擧げて言ひ得ない程の事實があるのである。

又自己の種族を完全に保護し繁殖せしむるためには、種々の方法を以て、子孫の生育に便にし、ここに種子の散布の色々な形式を吾々は見るのである。種子そのものについてもその構造は全く生れ出づる幼植物のためにされてゐないものはないのである。

或は環象の不利なる時は自己體を犠牲にして、子孫を形成する等といふことが多く菌類黴類等に見受けられる現象である。

かくの如き植物界の此等の配慮努力が、植物生活の中の最も高い職分であるといふことがうなづかれるであらう。

### 第三節 動物界に見る母性の表現

動物界に於てもその最初は母なるものの配慮はなかつたのである。

吾々も知るやうに下等動物は皆孤兒で家もなく母の配慮をも知らないのである。土か水か空氣が彼等の家であつて、生れながらに孤獨に甘んじてゐるのである。然し次第に原生下等動物から、腔腸動物、棘皮動物、蠕形動物、軟體動物と進化して脊椎動物になつて來ると、母なるものの配慮が表れて來るのである。何時から表れて來たかは不明であるが、母性といふものが長い間進化して來て、漸く表はれて來たことは慥かであらう。勿論無脊椎動物では母の配慮はあつても、僅かであるが、脊椎動物の最高の二大部類に至つて顯著に表はれて來たのである。

卵に對する配慮は見られるが、之は子に對する眞の意味の母の愛とは全然別なものではあらうが、然しその初現と見て差間はなからう。今その例を多くの動物界にとつて見るに、

哺乳類は母が子供に授乳するから、そこに生理的並びに心的母性母心



が發達してゐることは疑ひない。猿の母親が子に對する愛情の切なるものは人類のそれと殆んど變りはない。赤兒の子猿を失つた母猿の舉動について、ある學者は次ぎのやうに言つた、實に悲惨なもので、丁度失神でもしてゐるやうに、長い間何時までも死體を抱いて、食物も録にたべずそこに坐り込んだまゝ、涙に暮れてゐることもあれば、時には悶死することもある」と。又こんな例もある。子猿を持つた母猿が、獵師の鐵砲でその子猿が打たれた時、青葉青草を以てその傷口を壓へ、死んで行く子猿を人間も及ばぬ程看護し、怨めしさうに獵師を睨みつけながら、自分も砲彈に打たれてたふれたといふ話もある。

又子鯨は常に親に伴れられて、遊んで居るのであるが、この子鯨を捕へると母鯨は非常に強暴となり、船を轉覆させ、不恰好な體の小さな眼に涙をたたへることさへあるさうである。これは或る處の言ひ傳ひのやうなことであるが、子鯨を捕られた母鯨は、直ちに其處を退去したが、その後毎日のやうに、同時に沖合に來て、悲鳴をあげて居たといふことである。一般に猛獸獵で一番危険なのは授乳期であるといふことは、この期は母性の發現過度なるを以て、その氣が荒々しくなるものであると見られる。

**カンガルー**の雌は子供を腹の袋に入れて保護し、その袋の中に乳腺の開孔があつて、在袋期間その乳によつて養育され、充分成育してその袋から出るのである。

鳥類では郭公や家鴨等の例外はあるが、大抵の雌鳥は抱卵といふことをやる。即ち自己が生み落した卵の保護に任ずると共に、雛鳥の孵化を劃策してゐるのである。この抱卵期に少しでも邪魔をすると、通常は溫和な雌が猛然と反抗することは、吾々が鶏や其他の家禽に見られるので



ある。一旦雛鳥が生れる時は、之に食を與へ住家を造り、色々の教育的行動に出づることもあるのである。極地に住むペンギン鳥は、雌の腹に羽毛の袋があつて、卵をも雛鳥をも、この内に入れて、寒氣から保護をしようと云ふことである。又鴨などに於ては、その雛鴨と居る時には、偶々獵師でも行くと、親鳥は數間向ふへ飛び出しバダ／＼羽ばたきをして、さも負傷でもしてゐるか、のやうに見せて、注意を自分の方へ向け、雛鴨を助けるといふことである。

爬虫類の海龜は海岸の砂を掘つて産卵し、後へ砂をかけて保護をしておくし、蟒蛇は卵を産むとこれを真中に置いて、グル／＼と太い身體で取り巻いて、凡そ十週間も保護して居るさうである。

昆虫類の蜂のあるものは、子蜂に青虫を與へ、又孵化もせぬ卵にその附近に青虫を半殺しにして置く蜂類もあるのである。

ミジンコの背中には、子供を暫く保持する室があつて、その子を養ふ所の或る種の養分が出るのである。

其他動物界に於ける母性の表現は、擧げて數へることが出来ない程あるのである。然し中には全然母性の發露を見ない動物もあることを知らねばならない。

#### 第四節 母性發達のための條件

人生に見られるやうな眞實の意味の母の愛が發展し、卵の孵化より表はれた子を愛し育てるやうになるには、生物界に種々の變遷を要する。少くともその四變化があつて、始めて生理的母性が、心的母心となるのであるとヘンリードラモンドが言つて、その四徑路を示してゐる。



一 子供の数の減少

子が多くては、とても母親がこれを愛護しつくせないから、母の愛が行はれるためには、子の数を少くせねばならない。それ故、自然は子の数を減じて母心をして可能ならしめてゐるのである。或る下等植物は一夜にして極地の風物を、赤くするほど多く殖え、輪虫類の或る者は二十四時間中に四回繁殖し、十二日経つと千六百萬の子孫を生ずるものがある。魚類は一尾にして數千個、爬虫類は百疋位、鳥類は十個或はそれ以下、哺乳類の高等なものになると、一疋(或は一人)である。かくの如く子の数を減じて母の愛を集中することにしてゐるのである。

二 母親をして其子を認めしむること

下等動物界には我が子を我が子として認め得ない程、親と子との體形

上に生理的の變異がある。従つて科學者が永らく同種の動物を以て異種の動物として居つたものがある。認識力のない動物は兎に角として、充分立派な視覚的認識力を備へた動物でも、其の子を認めることの出来ないものがあるのである。これではどうしても心的な母心を起させることが出来ない筈である。

そこでこの母性を完全に發達させるためには、その子を親に類似させるといふことである。生れた兒が最も親に似てゐるといふのは胎生現象が最もよい。胎生では長い間ひそかに之を隠して置いて、蔭にこれを養育し、いよ／＼となつてからこれを表はすのであるから、天然の行ふ變化は常に簡單で經濟的であると言はねばならない。

無論、高等動物に於ける胎生兒が全く親と類似してゐるといふことは言へないが、兩者の差異點は下等動物のやうに甚しくはないのである。



このことが母の愛をして子に集中させる第二の變遷である。

### 三生兒の纖弱

生れた子が直ちに獨立の生計をなし得るなら、第二の徑路も何も役立たないであらう。所が自然は母が子を認めると同時に、子が母を認めるやうに、生兒を纖弱にしたのである。生兒は纖弱なるの故を以て、母親を認め之に縋らねばならない。かくして母子間の接近行はれ、一旦この親子の結合が出來ると、容易に離れないのである。この時代は子は親に近寄るべく強ひられ、親は子に近寄るべく強ひられてゐるのである。

### 四哺乳愛

母が子を養ふべく強いられてゐるのは、生理的に云へば哺乳であり、倫

理的に云へば愛である。

蓋し、この哺乳といふことが、所謂母性を發達させた事に重大なる關係があるのである。一般に母親は子に乳を弄らすといふことは、一種の快感を覺えるさうであるが、哺乳動物に母親の愛情の濃厚なものが多いため、こんなところから來て居るではないかと思はれる。子供も亦、母親の乳首を弄つたり、頭髮を摘んだりすることが、何となく氣持のよいものやうである。考へれば哺乳動物では哺乳といふことが原因になつて母が子に對する愛情が濃厚となり、更らに子が母の愛情に感ずるやうになつて來るのだと見られぬでもない。この母子間の生理的結合が引いて、倫理的な愛情となつて表はれたものであらう。



## 第八章 父 性

### 第一節 父性の進化

母性の進化に次いで、必ず行はれねばならない現象は父性の進化であらねばならない。母性のみ進化しただけでは、尙ほ自然界は完成せられたと見られないことは事實である。

父性は母性の進化しつゝあつたこの長年月を依然停歩の有様で存在して居たであらうか。母としての進化が着々實現されつつあつた時に獨り父性のみ原始的状態に止まつてゐたのであらうか。この疑問を一言にして解決して見るならば、自然は母の進化の裏面に父性の醇化を計るために努力したのであると言ひ得るであらう。

憶へばこの父性の進化はその徑路たる實に驚異に價するものがある

のを見る。この進化の始まつた頃は、父性は母性より遙かに劣悪な状態にあつたのである。下等動物に母性の發現を認め得ないといふ論法から言ふならば、下等動物の父性は認め得ないといふよりも全然皆無否な考へ得ないことであるのである。父性らしい行動を自然界に認め得たのは高等動物の發現に至つてからのことであつて、何時から發現したか不明である。高等動物にもせよ、鳥類等は父母兩性共同して巢を作り子を育するも、哺乳類になると却つて父性の退化してゐるのも見られる人間界でも或る意味に於いては父性の退化を承認し得るも、理智に富んだ動物であるの故を以て、道徳律を以て父性の退化を防止して居るの狀態である。

人類の母性に於ては、つつましい生活——同情、忍耐、配慮、優愛、——が形成されたに對して、父性に於ては、勇ましい生活——力、勇氣、剛毅、堅忍、自重



——が形成されたのである。これ等兩方面の生活の混在が、益々人類の子孫をして優秀なものとして、萬物の頂位に達せしめたのである。更にこの兩生活の混在が人類の圓滿な家庭生活を實現させたと思られるのである。

父性に保護されない子は死滅し、保護されると無事に發育する。父性が母子を保護すればする程、三人のために幸福が恵まれる。母性は子を保育し、子はまだ役立たないといふ時代には、父性は是非獨りて三人分の食物を求めねばならなかつたといふことは、動物界に家族制度が生じ、果實を食物とする時代から肉食時代に入った頃からなのである。この一事は確かに父性の進化なのであつて、道德的には父性に満足、愉快、進歩等の諸を與へ、又同感、克己等の諸徳を涵養するに至つたのである。

## 第二節 植物界に見る父性の表現

植物界には母性の表現のやうに顯著な父性の表現は見られないが、無花植物から有花植物へと進むにつれてそこに母性の初現を見たのであるが、それに附隨して必然的に父性の初現が生じたのである。

有花植物に至つて雌雄性を異にした器官が生じて居るのであるが、その雄性器官たる、葯とか花粉とかいふものが、色々に構成せられて、時に多量なる時あり、粘着性に富むときあり、成熟の時期を異にするといふ風に、他生存奮闘のためにあらゆる手段方法を講じてゐるのを見るのである。有花植物に於いて、單性花、雌雄同様、雌雄異株等といふ植物の發現を見たことは、或は植物界の原始的な状態であり、退化であると見る人もあらうが、一面から見る時はこれ父母兩性の進化なのである。



### 第三節 動物界に見る父性の表現

動物界には父親の進化を妨げてゐる例が多く見られる。蟻螂は交尾が終ると雄は雌に食ひ殺され、蜜蜂や蟻では交尾後、雄はすぐ死ぬるのを見る。蜘蛛の如きは、一種不可解の交尾を遂げ、悪くすると雄が雌のために食ひ殺され、その食ひ殺したことによつて、雌は完全に受精作用を遂げるといふ現象もあるのである。これ等はすべて自然の妙法から行はれる現象であると言へば、それまでであるが、動物界の父性が慘虐に會ふといふことが、又彼等種族の保存上重要なことであるから、父性は犠牲的行爲を以て彼等種族のために盡してゐるとも見られるのである。

然し自然界はすべてかくの如きもののみではない。むしろ傷しい程父性に負ふ所が偉大な動物もあるのである。池中の小動物として見られる子負虫は、卵を脊に付けてゐるのは、雌ではなくて雄なのである。然

もその雄たるや全くその卵には關係のないほんの他人なのであるから可愛さうである。雄はこの他人の子卵を背にどつさり負はされて、自由に遊ぶことも出来ねば、夜間空中を飛び廻ることもならず、卵が孵化した後でも、その殻が附着して居るから、一生涯、不幸に終るのである。このために雄の子負虫は命を失ふことがあるのである。かゝる現象は白隠禪師にあらずんば容易に解脱し得ない事であらう。まして池中の小動物に於てをやである。又南米産の所謂産婆蛙といふものは、雄が雌の上のり、後脚で卵の紐を手繰り出し、自分の肢に纏ひつけ、安全な場所に隠れてその發生を待つてゐるものがあり、そうかと思ふと或る種の南米産の蛙は、雌が一粒づつ卵を産み出すと、雄がその卵を自分の口に入れ、そして彼の叫囊へ卵を入れて保護する。時期が至ると、幼い蛙が父親の口中から躍り出すといふ奇妙なものもあるのである。これ等はすべて、父性



の奇習であつて、これも自然界の常法ではない。

動物界に於ける父性の表現として顯著なものは、まづトゲウヲであらう。この魚は、雄が小さい流れの静かな所に巢を作り、それが出来ると雌をその中に追ひ込んで産卵させる。そしてそれに雄が受精するのである。さうすると雌は直ちに逃げ出してしまふ。こんなことを度々やつて、巢の中に卵の数が多くなると、雄は全力をつくしてそれを保護するのである。卵が孵化するまでは、約十日間ばかりかゝるのであるが、その間雄は寸時も巢から出ることなく、又仔が孵へつてからも一生懸命にこれを保護し、仔魚がひよつとして外へても出るならば、すぐに仔魚を巢の中へ追ひ込むのである。又時々水を動かして仔魚に新鮮な水を供給して、呼吸に便にし、食物を支給するのである。

又或る魚になると、雄が卵を口に入れて保護し、仔魚となつて水

中を遊いて居る時でもひよつとして危険が到来するやうなことがある。雄はある合圖をして、仔魚を自分の口中に入れてしまふといふことである。

タツノオトシゴになると雄の腹部に袋状のものがあつて、それに卵を入れて保護してゐるのを見る。その袋は一種の隠所であるばかりでなく、其處には多量の血液が出て居て、そのものが直ちに子魚の養分となるのである。カンガルーの雌のやうなことをやつてゐるのである。

これ等動物では子の保育は全く雄にのみ任せられてゐて、雌は知らぬ顔をしてゐるのである。

次第に高等動物に進んで來ると、父性は餘程完全の域に進化してゐるのを見る。即ち鸚鵡は一夫一婦の模範的鳥類として認められてゐるのであるが、夫婦の情愛は人間も及ばぬ程であり、雌が病氣でもせば、雄は自



分て口に食物を銜へてこれを雌に與へ、親切に看病をすることがあるさうである。若し病死でもするやうなことがあるれば、雄も後を追ふて死出の路にお伴をするといふことまで或る人は觀察してゐる。

ゴリラは一夫一婦、或は一夫多婦とも稱せられてゐるが、單調な家族生活を營み、牡は家長となり、若し危険のある時は、まづ牝と仔とを速かに他に移し、牡自ら防敵に當るといふことである。

廣く見ると數限りのない程、動物界の父性の表現が見られる。

#### 第四節 父性發達のための條件

前章に於いて母性發達のための條件といふ節に於いて、ヘンリー・ドラモンドの説を借りたから、ここでもそれに關係付けるために同氏の説を借りることにする。氏は父性發達のために條件をやはり四過程に分け

てゐるのを見る。今逐次的にこれをたどつて見るに次ぎのやうである

##### 一 男女同棲期を長くすること

これは即ち父を母に關係させることとなるのである。兩性の結合を單なる一時的の事件とせず、永續的狀態とすることである。一般動物界を見るに雌雄の同棲期は至つて短かいのを見る。人類もその始原的狀態にあつては、なほ動物界の範圍を出てなかつたのである。これでは父性の家庭的訓練といふやうなことが行はれやうもないのである。

父性の進化のためには、まづ第一步にこの兩性の同棲期を限定しないやうにする必要があつたのである。そのためにはこの同棲期間の短かい原因を除去せねばならなかつたのである、この同棲期の短かくする一大原因は限られた時季に於いてのみ子を育て得るといふことである。



この原因を除去すれば、如何なる時季に於ても子を育てることが出来るといふことにならねばならないのである。更らに夫婦間に深い愛情が存せねばならないといふこともある。この二條件が、兩性の同棲期を長くするに與つて力あるのである。

### 二 理想的 一夫一婦

同棲期を限らないでその時を延長し、以て愛の生ずる機会を増加しても、愛が散亂するやうなことがあつては、父性の進化は覺束ないのである。それで父性の圓滿な進化のためには、どうしても愛の對象物を單一にして、深刻な愛情を構成させることが大事である。動物界に於て一夫多妻から理想的 一夫一婦に進むにつれて、愛の目的物が專一となり、従つて父性の進化も助成されたのである。

### 三 理解し合つた同志の求婚

無理解求婚は父性の進化を妨げるのみならず、母性の進化も害せられることはよく見ることである。理想的 一夫一婦は結構なるも、その一夫一婦が無理解の結合であるならば、遠からずして兩性間に破綻が来る。それで父性を進化させるためには、相思相愛の求婚を奨勵せねばならない。この種の求婚は男女の情緒を強め、認識力を明かならしめる點に於て、人間進化の一助となるのである。それで適當にこの時期を長くすることも必要であるのである。然し許嫁といふことは相思相愛といふことは別物である。許嫁求婚はややもすれば無理解求婚となる懼がある

### 四 子に惹かされて



男女は其子を愛するがために、又互に相愛するに至つたといふことは、或る點まで信じ得る眞理である。世には子なきの故を以て夫婦間の愛情の薄弱なるものがある。子を得て始めて夫婦間の結合が親密となり、永遠性の家庭生活を營むやうになるのを見る。子なるものが、母の心情からも、父の心情からも尊い愛なるものを惹き出したと見て差支ないのである。

## 第九章 女性問題

### 第一節 女性問題の起因

「新しい女」といふ言葉は、現在の吾々には左程耳新しいことではないが、まだ心の奥の何處かで異様なひびきを覚える。これは一體どうしたこ

とだらうと靜かに考へる時、吾々は其處に或る大きな問題にぶつつかるのである。その問題といふのは抑々何であらうか。それは彼等新しい女と呼ばはるる女性達の深刻な要求である。この彼等女性の社會に對し、將たまた異性の男子に對して要求して居ることは、確かに社會的に、道徳的に、經濟的に、家庭的に大なる警告を與へたのである。彼の女性達の要求の善惡正邪を批判することは避けやう。唯だ、何のために一般女性殊に若々しい女性達が近頃に至つてかゝる要求をするやうになつたのだらうかといふその原因について、考察して見たい。

一言にして云へば、文化の進運につれて従來女性が男性生活の方便としてのみ生活して居たといふ一事が女性をして覺醒せしめ、所謂この新しい運動を始めるやうになつたのであらうと思はれる。故にこの種の運動を視して單に危険思想なりとするは尙ほ見方のたりないのであら



う。危険思想と見るよりも寧ろ時世の要求の然らしめたものと見る方が正當であると思ふ。更らに逐次その起因について考察して見たいと思ふ。

### 一 人格上の問題

思想界の變轉が、女性問題に一火を點じたことは疑ひないことである。思想界の變轉とは人格尊重、人格平等といふ問題である。女性も同じ人間と生れて、從來のやうにまるで男性の附屬物のやうにして生活せねばならないのであらうか、といふ疑問はこの思想の變轉と共に必然的に生ぜねばならない事件である。女性も既に人間である以上一個の人たる人格を具へ、女性として實現すべき理想を所有せねばなるまいとは、その疑問の解決された曉に認めらるべき結果である。即ち女性は人の妻

となり、家庭の人となり、人の子の母となる前に、天與の人格を完成せねばならないといふのは、新しい女性の絶えない憧憬なのである。この憧憬が熱烈になればなる程、彼等女性自身の覺醒運動が熱烈になつたのである。従つてこの種の運動は同じ思想の流れに棹さして居る一般世人から同情と注意とを得てその火が天の一角で焰を擧げたのである。その動機は確かに批難すべき點がなかつたであらう。然しそのために採つた手段方法の是非は一般世人から批判の眼を差し向けられたことは事實である。この後者の問題は今尙ほ未解決のまま進行してゐる。

### 二 近世科學の進歩

教育の進歩は科學の進歩を促し、科學の進展は教育の發展を來たしたことは事實である。この教育事業中女子教育問題は近世に至つて殊更、



らに高唱され、進歩發展の域に到來して居る。この女子教育の進歩は必然的に女子の科學思想を豊富にしたのである。科學の進歩は更らに思想上に新眞理新傾向を附與し宗教上の疑惑を氷解して、舊來の社會的慣習から脱出するやうになつて來たのである。この社會的慣習の打破が自然に女性を導いて、自身に疑問を抱かしめ次いで新たな覺醒を惹起したのである。

かゝる思想界の變遷、科學の進歩は、男女兩性をして新たな覺醒を起させ女性は何時まで男性の手足纏となつて生活すべきにあらず、男性は女性を從來のやうに一器具の如く据え置くべきものではないといふ考へを起させたのである。そして若し從來のやうな状態を續ける時は、男女兩性が自ら生活の破滅を召來せねばならないといふことになつたのである。

### 三 經濟的の獨立

文化の進運と生存競争の激不激は殆んど比例をして現はれる。この生存競争の脅威が、男女性をして協力生活をせねば相互に生命を全ふし得ないものであるといふ自覺を起したのである。その實例があまりに多過ぎるので、人間生存上一大恐怖を惹起しつゝあるのである。従つて女性は人格的にばかりでなく、經濟的にも獨立せねばならないといふ感而起させた結果、從來の女性觀に一大變動を來し、永遠に満足し得る新思想を高唱するに至つたのである。

かゝる思想は全く堅實なものであつて、大いに吾々が傾聽せねばならないことなのである。徒らにこれを侮蔑し、翻弄し、否定することは、却つて正當なる解決を與へ得ないのみならず、延いては社會を破壊するの遠



因となるものであるといふことを覺らねばならない。

この女性問題の研究と女子教育の改善とは刻下の重大問題であらうと思ふ。

## 第二節 女性の本性並びにその本務

前節に於て女性問題の起因について略説し、最後にこの女性問題は慎重な態度を以て研究を重ね、次いで女子教育問題について深く考慮せねばならないことを暗示して置いたが、吾々は時々無理な女性論を耳にすることがあるのである。即ち女性を以て男性と同等なるものと考へる點からであらうが、男性のやることは何んでも女性に於いてもやり得るものである。決して行動から割り出される男女两性間の差別はないものである。男性が軍人になるなら女性も軍人、男性が會社員をやるなら

女性も會社員、男性が土方をやり得るなら女性も土方をやり得るものであるといふ風に主張することである。熱々考へて見るとこれらの事柄はすべて經濟的獨立といふ方面から言ひ得たのであらうが、更らに社會的地位に至るまで男女同等であるといふ風に考へて居るのである。そして言ふには女性なるが故に、家庭の人としてしまふのは不合理である。經濟的にも社會的にも活動し獨立もせねばならぬと。これは確かに或る點まで眞理と見て差間はなからうが、經濟的にも社會的にも道德的にも活動し獨立し得るからと言つて、直ちに男女性同等であるといふことは論理にかなはないではあるまいか。それから又、種々の心理學上の實驗調査から割り出して男女性同等論を高唱する論者もあるが、それは尙ほ特殊的研究なるの故を以て、これを直ちに一般眞理となし、この不確かな眞理を懸けて男女性同等であると結論することは、甚だ非科學的な不



完全な推論であると思ふ。前に男女の優劣論の所に於いてこれ等の諸項について説述してあるが、ここで婦人の本務を如何にと提出する前にこの男女性の差異について、靜思する必要があるのである。

男女共に心身兩方面に於いて大いなる差異があるのであるから、従つてその本務とする所も違つて來ねばならないではあるまいか。これからその本務について少しく考察して見たいと思ふ。私のやうな一男性が婦人の本務を云々しては、或は賢明な女性から恨まれるかも知れないが、然し私はこの難關を豫想し更らにその難關を易々と通り得るために、中性となり、正常な立場を持して出来るだけその種の謗りを輕減したいと思ふ。

シヨツペンハウエル氏は、同境遇に於いて、同一教育を施したからと言つて女性が男性に改造し得ることもなければ、男性を女性に變性させる

こともむづかしい。男女兩性は生理的にも心理的にも、先天的に異つてゐるものであると言つて居るが、確かにそうである。女性の思想家**エレンケー**女史も、大音楽家となる人を、機關手にするといふことは、誠に損ではあるまいか。現今の社會が女性をして靈の教育者である母とはしないで、男性のやうに外的活動をさせるといふことは、是れ力の誤用であるといふ風な意味を述べ、更らに女性が平和會議に出で、政治の檜舞臺に立つて滔々と論じ得ても、家庭の子供が喧嘩などをして泣いてゐては何にもなるまいと言つて居るが、この言葉を聞いて吾々は直覺的に女天下の風刺的漫畫を思ひ出さずには居られない。

或る學者が「婦人の婦人たる所以は、卵巢の賜である。婦人の生存の理由は生殖のためである」と言つてゐるが、これはあまりに論であるかも知れないが、一面から見ると女性は生殖作用の結末を付けねばならない



といふことは信じ得られる。科學の進歩は女性のみ生殖にたづさはるものでなく男性も同等の價值責務を以てこの作用に關係することを證明してゐるが生れた子供を誰が保育し得るかと言へば、誰れでも乳房の所有者女性であると云ふであらう。然し或る人は云ふであらう、乳房の所有者は女性のみでなく、男性もそうである。男性に乳房が發育せずして、女性にのみ發達するのは永年の因襲から持ち來されたものである。これから男性も子供に時々乳房をいぢらして居ればきつと乳房は發育するのであると。これは一見一理あるやうであるが乳房と卵巢とは密接な關係のあることを知らないでの論法であらう。かゝる論者は子供に乳房をいぢらして居ると男性にでも卵巢が形成されるものと考へて居るかも知れない。然しこの生理的の差異は後天的のものでなく、先天的のものであることは前に述べた筈である。この先天的な生理上の差

異を棚に上げて徒らに奇論を弄することはまず止めた方がよいと思ふ。男性は男性の務に對して自由忠實なるやうに、女性は女性の本務に對して自由であり忠實でありたい。女の本務について自由であれといふのはみだらなことを氣の向くままにせよと言ふのではない。この自由なるものは社會的に道徳的に個人的に非常に束縛を受けねばならない自由なのである。束縛といふことを豫想されてゐる自由なのであるから誤解のないやうにせねばならない。

「婦人よ!! すべからず家庭に歸れ、疾く來よ!! ホームこそ、其の女性として最も偉大なるそして尊敬すべき事業をなし得る自由の樂園である」と言ひたい。殊にこの要求は男女性を問はず、吾々人類のために、かく叫びたいのである。私はこの言葉で所謂新しい女の誤れる思想の所持者から大いに反感を買はう。



私は生物學上の眞理を是認し、人類の發展保存のためを考へての事柄ならば何んでも納得し得る。そのための家族制度の改良、そのための女子の高等教育、婦人の社會的事業、結婚の理想、獨身、晩婚ならばよろしい。更らにこの眞理、この理想目的のための *Self birth control* ならば、あながち有害ではあるまい。唯だ自己享樂のためのそれならば大いに考へねばなるまい。といふよりも大いに反對せねばならない。

女性よ!! 家庭に歸れ、そして魂の教育者となれ、と言つたことに對して、これは女性を甚だしく侮蔑したものであると考へる女性があるならば、人類のため割腹せよと言ひたい。家庭に歸つて母となることを以て女性自身を賤しめたるものであると考へるのは、女性自身のデイクニテ、I を高める所以でなく、却て自ら賤下するものではあるまいか。

以上大略女性の本務について説述したが、女性はすべからく斯々ある

べしと要求するのは、男性はすべからく斯々あるべしと強く要求してのことである。決して女性にのみかくあるべしと強へるのではない。男女兩性心からなる自覺を以てその本務に忠實なるべきであることは言ふを待たないのである。

### 第三節 女性として心得べき性道德

人類が殊に近代的人類が、戀愛のためにすべてを犠牲に供して平然として居るが、これは誤れる戀愛至上主義者のすることであつて、心ある人は決してそうはしない。靜かに考へて見ると戀愛は至上でもなく又至下でもない。原則としては戀愛の地位は人生の至上ではあるまい。人生の趣味又はその生存活動の一混合體としての人に於ける一要素にすぎないであらう。



前にも述べたやうにブレトニツクの愛ならば、いざ知らず現代人の口にして居る戀愛そのものは、直ちに兩性の結合に導き、兩性の結合はまもなく生産に進み、子女の出産は自らその保育教育に結果付けられてゐる。戀愛は世俗的に解釋したら、或る點まで發動の途に上つた性慾又は性愛だと見られるかも知れない。然しこれを科學的哲學的に論議したら結局人間の心情であると言ふよりはなからう。

戀愛の解釋は兎に角として、現代社會に生存してゐる吾々兩性が相互に努力せねばならないことは、正しい意味に於ての戀愛の正當なる保護及び順當なる解放であらう。

抑々現代人の戀愛觀換言すれば性道德觀なるものは一朝一夕にして突發的に發生したものでなく、又古來からかゝる性道德觀が人生に存在して居つたのでもない。それには父母本能の進化と併行した性道德

の進化の行程を経て、今日のやうな性道德が形成されたのである。この性道德と人間生活の進化とは切つても切れない關係にあつたのである。唯だその概念構成の過程において、經驗的事實とかけはなれた對象をもつて居たにとどまるのである。

性的生活は人生中最も原始的な様式即ち動物的衝動的な生活であると或る人から言はれてゐるやうに、性道德はややもすれば盲目に流れ易い即ち有意識状態からかけはなれて無意識状態となりがちなものである。然しながら人生のこの種の衝動的行為に對しては、蔭ながら力強い或る拘束力を有つてゐるものである。それが無意識的なればなる程拘束力が強力となつて來るのである。或る思想家も言つてゐるやうに、性道德は全く無意識的禁制である。睿智が最も働いてゐない禁制である。例へば貞操觀念の如き、根本的な性道德ではあるが、決して睿智的ではない。



又論理的でもない。その概念すら明瞭ではない。ただ盲従である。と。尤も原始的性道德並びに現代の文化的道德の法則といふやうなものを考へて見ると、それは社會生物學的又は社會心理學的根據から割り出されてゐるものではあるが、その根據は吾々のやうな文化人の知能で以て理解し得ない事が存在するのである。性の制度は睿知的生活の支配を受けるよりも、むしろ經濟的生活の支配をより多く受けて、近代の如き性道德の混亂状態が生み出されたのであらう。要するに固定された性制度が、進化した生活事象と相容れないところから起つてゐるのである。

従つて新しい意味の性道德は、この一般社會生活の進歩の上に形成されねばならないことになつて來るのである。在來の性制度は産業上の個人的自由主義から影響されてでもあらうが、極端な個人的自由主義に流れ、戀愛觀とし言へば、必ずこの種のものであつたのであるが、これは性

道德の建設作用と見るよりは一種の破壊作用であると見られるのである。産業上の個人的自由主義が次第に崩れて、生産が個人的収益の手段ではなく、人間の社會的共存の生活方法とならうとしてゐるのである。誰れでもこの共存の活動に共同せねば生存不可能となつたのである。この傾向が女性の生活にも影響して、従來の受動的、消極的制度、性生活から脱却して、積極的に能動的に、社會的共存の共同動作のために努力せねばならないやうな性道德が認められて來たのである。従つて性道德は強大な社會的拘束を受けてゐると言ふことが出来る。然るにも拘らず今日の女性が生活的には覺醒しながら、性的には頽廢的になりがちなのはどうしたことであらう。これは要するに従來の社會的要求が、女性をして男性の享樂の對象として育て上げて來たことの惰性であらう。

さればこれからの女性は、男性が複雑な社會的生活を営みながら、同時



に性的生活を実現してゐるやうに、社會的生活を以て性的生活に入り込  
むことが必要である。其處に女性としての性道德の完成があらう。

小學校兒童の生命と性問題終

大正十三年五月十八日印刷  
大正十三年五月廿三日發行

定價金貳圓五拾錢

不許

小學校兒童の生命と性問題

複製

著者 關原吉雄

發行者 大葉久吉

東京市日本橋本銀町三丁目拾四番地

印刷者 東勇治

東京市小石川區久堅町百八番地

所刷印 館文博 所刷印

發行所 關西專賣

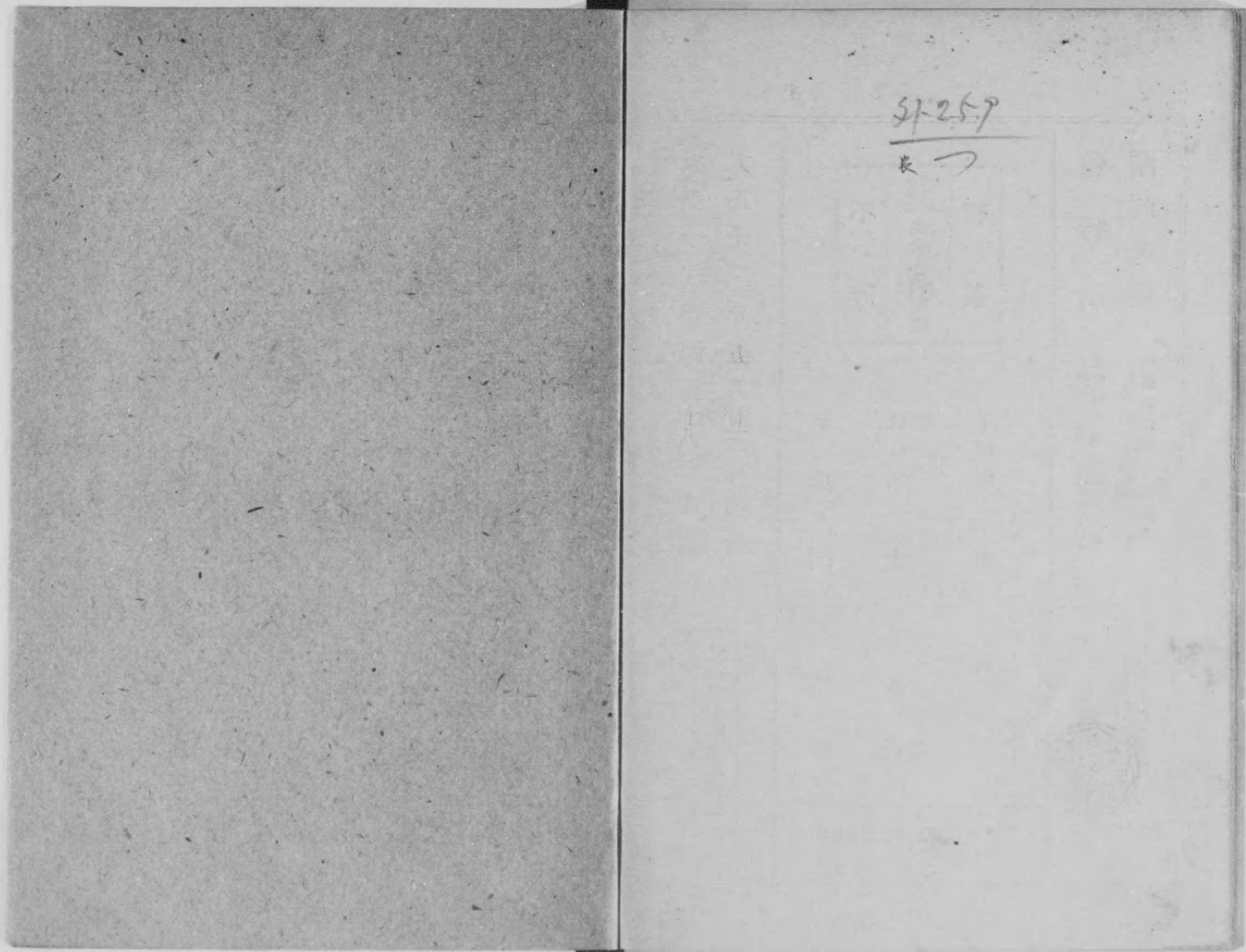
東京市日本橋區本銀町三丁目  
振替口座東京二八〇番

大阪市西區阿波堀通四丁目  
振替口座大阪四三番

東京寶文館  
株式會社 大阪寶文館







51-257

長 7



~~252.5~~  
~~99~~

367.6  
SE28